

イスラームの経済倫理 ——『利得の書』について——

黒田壽郎

イスラーム経済とはなにか。それは具体的なイスラーム世界の歴史的展開にどのような役割を果たしてきたのか。このような問題は、残念ながら在来の研究の視野にほとんど入っていなかったといったら過言であろうか。例えば中東全域にわたり、いかなる時でも、イスラーム経済の影響が濃厚であったということはあるまい。しかしイスラーム性がドミナントであったさいの分析に、イスラーム経済的な観点をまったく採用せずに、どのようにして客観的な分析が可能であろうか。そしてイスラーム世界といわれる地域において、イスラーム経済的なものが一かけらもうかがえない事態なぞありえないとするならば、この世界の経済倫理とその構造の究明が、研究上きわめて重要であることには疑念の余地はあるまい。

これまでもイスラーム世界における経済問題に関連する諸事象については、各論的に多くの研究が蓄積されてきた。租税、相続、市場監督制、イクター制等の問題から、通史的な金銀の価値、物価の動向の研究にいたるまで、調査、検証は着実に進行中である。ただし欠落しているのは、イスラーム世界において、かつて一度は支配的であった経済システム、あるいはそれを機能せしめていた背後の、根本的原理の理解のための統合的な視座である。ひとは簡単にそのようなものの欠如を前提とする。あるいはその重要性を否認する。対象の不在によって対象を説明するオリエンタリ

ズムの当然の帰結はこのようなところにも結晶しているが、その種の客観性の拒否は、決して地域研究を裨益するものではない。

本研究所はこれまで、例えばイスラーム経済論研究のための古典的著作といわれる M. B. サドルの『イスラーム経済論』、『無利子銀行論』等の著作の翻訳、紹介を積極的に行なってきた。これらの著作の紹介は、イスラームの経済思想の全体像を把握する上できわめて重要な意味をもつものであり、それはイスラーム世界の今後の経済活動の趨勢を占う上で不可欠であるばかりでなく、歴史的 analysis を行なうためにも意義深いものと思われる。今回は、これを補う意味で、イスラーム世界の経済活動を律する固有の倫理について言及した、『利得の書』を翻訳、紹介することにした。ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』が、近代西欧における資本主義の興隆の分析にさいして重要な意義をもつものであるとするならば、本書はイスラーム世界の経済体制の形成を理解するために不可欠の書とみなされうるものであろう。

宗教としてのイスラームの固有性、あるいはイスラームという教えの固有の構造、現実的生活との関わり、それがもつ社会、伝統形成の特殊のネットワークを理解するためには、それがいかなる精神性を追究し、いかに現実の生活と関わっているかという点についての考察が不可欠である。聖なるものと俗なるものにたいするこの教えの関わりは、他の宗教とはきわめて異なる性質をもっている。預言者自らが深く商業という世俗的な営みに直接に関与していたこの教えの場合、世俗の事柄は、精神性至上主義の立場を完遂する他の多くの宗教とは異なった様相のもとにある。それはある局面においては精神的なものとは対立する場合もあるが、それ自体では価値の優劣を問われることはない。世俗の事柄と直接関与する商業は、それ自体で忌避されるものではなく、商業的行為は、独自の価値判断の体系にとづいて関係論的に分析されるのである。

利得、あるいは経済的利益がいかなる条件によって合法とみなされるか、

という人間の経済的活動の諸条件についてイスラーム法の立場から組織的に論じた本書は、イスラームの労働観、経済観を知るための格好の書であり、この教えが提示している統合的な経済的原理を理解するさいに不可欠であるばかりでなく、ムスリムの経済活動の背後にある特徴的性格を知る上でもきわめて有益なものといえよう。

本書の原題は、『悦ばしき神の恵みに関する利得の書 (Al-'Iktisāb fi-r-Rizq-l-Mustatāb)』である。わずらわしい美辞麗句を除去して、簡単に『利得の書』と呼びうるであろうが、その原著者はハナフィー法学派の大成者として名高いシャイバーニーである。彼の正確な名はムハンマド・イブン・アル=ハサン・アッ=シャイバーニー (Muḥammad ibn al-Ḥasan al-Shaybānī) であるが、彼はウマイヤ朝イラクの首府ワーストで回暦132年——西暦750年に生れ、その後クーファに移住して若冠14歳にして大法学者アブー・ハニーファの門弟となり、長じて師の学説の大成者として当代一流の法学者の地位を保持しつづけた。当時高度な学問で知られたクーファで研鑽にいそしんだばかりでなく、優れた法学者の例にもれずメッカ、シリア、バスラ、ホラーサーン等に旅して広く知を求め、時移ってアッバース朝に代わったのちもカリフ、アッ=ラシードの法官の地位にあげられた経験もある。

ただし彼は公職を嫌い、すぐに野に下って著述、教育に専念した。著書は数多いが、とりわけ重要なのは *Kitāb-l-Jāmi' al-kabīr* (『法学大全』)、*Kitāb-l-Jāmi' ṣ-ṣaghīr* (『法学概要』)、*al-Mabsūṭ* (『マブスート』)、*Kitāb-s-Sīyar al-Kabīr* (『シヤル大全』) 等であり、同時に師のマーリク・イブン・アナスの編纂した伝承集ムワッタアの校訂本が有名である。

以上の著述によって、彼は事実上のハナフィー派の大成者とみなされているが、同時に各法学派の枠を超えて、後代に多くの影響を残している。

例えばマーリキー派の重鎮、アサド・イブン・アル=フラートも彼に師事し、強い影響を受けているといった事実に見られるように。彼は晩年ライイに移り住み、その地で回暦 189 年—西暦 804 年に他界しているが、この『利得の書』はその最後の著作とみなされている。

回暦 2 世紀という時期には、とりわけ旧ササーン朝の領域で伝統的なマニ教、あるいは地域的伝統への文化的回帰を訴えるシュウービーヤ運動が顕在化していた。時代は、このような趨勢にたいして、ムスリムの学者にイスラームの側からその現世観、生活観、端的には経済観、利得観を鮮明にするよう要請していたのである。イスラームの内部にもさまざまな傾向があって錯綜をきわめ、一種の交通整理が是非とも必要であったと思われる。

本書はこの種の著作としては最初の試みであり、しかも著者が超一流の碩学であるためきわめて重要な文献であるが、残念ながらその紹介が遅れていた。これまでエジプトのダール=ル=クトゥブにある手稿本が唯一のものとされていたが、誤謬、改ざん、欠落が多く信頼に足りるものではない。この手稿本が現在いまだにダール=ル=クトゥブに存在しているか否かは定かでないが、1938 年にエジプトでこれが出版されている。ただし内容の検討等が一切施されておらず、『利得の書』の要約ではないかという説もあったほどである。ただし 1967 年に、現在ダマスカス大学の教授であり、本書の校訂にあたったソヘイル・ザッカール教授が、イスタンブールのアフマド三世図書館ではるかに良質の手稿本を発見し、1980 年にダマスカスのアブド=ル=ハーディー・マルスーニー書刊から出版している。ここに訳出したのは、その第一版である。

長い学芸の伝統をもつ地域の手稿本の例にもれず、本書は若干複雑な由来をもっている。まずは本書の内容を口述したのは前述のシャイバーニーであるが、それを聞きとって著作の形態にしたのはその高弟ムハンマド・イブン・サマーアである。そして後代の者がこれまた著名な法学者サラフ

シーに、シャイバーニーの他の弟子であるハーキムの著した師の説の『要約の書』に即して、シャイバーニーの学説の解明を行なうよう依頼したさいに、サラフシーがこの『利得の書』の釈義を思いついたという訳である。したがって本文中でナレーターとなっているのはサラフシーであり、ムハンマドと呼ばれているのがシャイバーニー、原書といわれているのがムハンマド・イブン・サマーアの編纂した『利得の書』であるといった構造になっている。要するにここに訳出されているのは、シャイバーニーの『利得の書』にたいするサラフシーの注解なのである。

ところで注釈者サラフシーもイマームたちの太陽、イスラームの誇りと異名をとった回暦5世紀の大法学者である。彼の生涯については知られるところ少ないが、中央アジアで生れ、活躍した人材で、*al-Mabsūṭ* (『マブスート』)、*ʿUṣul-ī-Fiqh* (『法学論』)をはじめ、シャイバーニーの多くの書に優れた注釈を施していることで名高い。没年は回暦483年-西暦1090年である。

本書は小著であるためか、著者はとりわけ内容に関して整然とした整理を行っていない。訳者は読者の便宜のために若干の小節を設けたが、それ以外は改行等についても可能なかぎり原著の体裁を保持することに努めた。またかぎ括弧は編者の補足説明、丸括弧は訳者の補足説明である。

〈本稿は、昭和63年度～平成2年度文部省科学研究費補助金・重点領域研究(1)による「比較の手法によるイスラームの都市性の総合的研究——宗教意識と都市性——」の研究成果の一部である。〉

『利得の書』

慈悲ぶかく慈愛あまねき神の御名において

万世の主に讃えあれ。神よわれらが長ムハンマドとその一統、教友らすべてに平安を授けたまえ。

最良の禁欲家であるイマームにして、イマームたちの太陽、信者たちの誉れたるアブー・バクル・ムハンマド・イブン・アビー・サフルッ=サラフシー——神よ彼を嘉し給え——は以下のように口述している。貴方がたは私にムハンマド・イブヌル=ハサン（アッ=シャイバーニー）——神よ彼を嘉し給え——の著作中にある種々の言及や有名な故事を利用して、アル=ハーキムの著した『要約の書 (*al-Mukhtaṣar*)』に可能なかぎりゆきとどいた口頭による釈義を行ない、その学説の方法を明らかにし、その有効性の内実を顕彰するよう請われた。そのさい私は、ムハンマド・イブン・サマーアがムハンマド・イブヌル=ハサンから聞きとったものとして伝えている『利得の書 (*Kitāb-l-Kasb*)』の釈義を付加するよう思いついた。この書はムハンマド・イブヌル=ハサンの著作の一つであるが、アブー・ハフスやアブー・スライマーン——神よ二人を嘉し給え——といった高弟たちもこれについて師から聞き及んでいないため知られるところ少なく、したがって『要約の書』の著者アル=ハーキムですら、自著の中でこれについて言及していないほどなのである。しかしこの書の中には決して看過することが許されず、それを学ぶことに遅れをとってはならぬ多くの知が含まれている。よしんばそこには自らのために利得を求め、自らの手で利潤を獲得することに努めるよう人々にすすめる促ししか存在しないとしても、あらゆる者がこの種の知識に通じている必要がある。

われらの師であるイマーム（アッ=シャイバーニー）はこの問題に関して

故事を引きながら説明している。そこで私は師の言及されたことをなるべくそのままのかたちで伝えと同時に、故事に通じた古人の言葉、ならびに、自分がよしとするさまざまな解釈、指示を付け加えた。

本論：利得の定義

言語学者の一般的見解によれば、利得 ('iktisāb) とは、容認される手段によって財を獲得することである。そしてこの言葉はあらゆる事柄に用いられる。至高の神はこう述べられている。「なんじらの稼いだ (kasaba) 良きものを費やせ。」(第2章 267 節) またクルアーンには次のような表現もある。「なんじらに降りかかるいかなる災厄も、なんじらの手が稼いだ (kasaba) もの。」(第42章 30 節) この場合手が稼いだとは、自ら自分のためにならぬことをしでかすという意味であるが、このように自分のためにならぬ行為をなすことにも利得 (kasb) という表現が用いられているのである。またクルアーンには、「なんじらの稼いだ (kasaba) ものに対する酬いとして」とあるが、この場合は禁じられた罪を犯したという意味である。以上この言葉がさまざまな意味に用いられることは明らかであるが、財の獲得という意味が一般的である。

ついでムハンマドはその書を次のような言葉で始めている。利得の追求は、知の追究と同様にすべてのムスリムの義務である。そしてこの点に関してイブン・マスウッドが預言者から伝え聞いたという「利得の追求はすべてのムスリムの義務である」という伝承を引用している。また次のような伝承もある。「定め of 礼拝ののちになされる利得の追求は、定め of 礼拝同様義務である。」また預言者はこうもいっている。「良しと認められたことの追求は、勇者たちの戦闘のようなものである。それを求めて夜を徹した者にはあつゝ宥恕が下される。」ウマル・イブヌ=ル=ハッターブは、この利

得の追求を聖戦より上に位置づけている。それは彼の次のような言葉から明らかであろう。「神の恩恵を求めて地上を旅し、旅の途中で死ぬ方が、神のために聖戦に赴いて死ぬよりも望ましい。なぜならば至高の神は、その恩恵を求めて旅する者を、聖戦に加わる者の上におかれているのだから。」また、伝承に以下のようなものがある。「ある日預言者はサアド・イブン・ムアーズと握手をしたが、彼の両手がまめだらけであることに気付き、それについて尋ねた。すると彼は答えた。『一族の者を養うために棗椰子の栽培で鋤やくわを使うからです。』そこで神のみ使いは彼の手に口づけをしていった。『神よ、この両の掌を賞で給わんことを。』」この点については、必要不可欠なものを求めて働く者は最高の地位をうるという説明がある。つまりそれが定め義務遂行の基礎とみなされるからである。なぜならばこれなしに人は義務を果すことは不可能なのだから。従ってそれは、礼拝を行なうさいの洗浄と同じ地位にある義務とみなされるのである。

各 論

第一節 利得の必要性

第一に、ひとは十分な体力をもってこそはじめて諸々の義務の遂行が可能となる。ところでそのためには普通食糧がなければならないが、食糧を獲得するにはさまざまな方法がある。それは正当な利得('iktisāb)、力による奪取(taqhālub)、交渉による詐取('intihāb)である。ところで交渉による詐取は処罰に値するものであり、力による奪取は悪徳を含んでいる。神は悪徳を望み給わず、したがって食糧を得るためには正当な利得が相応しいと定められているのである。預言者はいつている。「信者の心は、彼の乗りものである。それゆえよくいたわらねばならぬ。」つまりそれに充分なものを与えて、よくいたわるべしということなのである。ただしそのため

には利得を欠くことはできない。例えば礼拝を遂行するためには浄めを行なわなければならない。そのさいには必ず水を貯えておく土瓶、あるいは泉から水を汲みあげる綱やバケツが必要である。礼拝を行なうさいにはまた、恥部を覆いかくさなければならないが、そのためには衣服が必要である。ところでこれら必要なものを入手するためには、利得を欠かすことができない。そして義務の遂行に欠かすことのできぬものの入手は、これまた義務に他ならないのである。

利得はあらゆる使徒たちが行なった行為であった。われわれは彼らの生き方に倣い、それを範としなければならないのである。至高の神もいわれている。「彼らの導きにつき従うように。」(第6章90節) ところで最初に利得に励んだ者は、われらの父祖アーダムである。クルアーンには以下のような記述がある。「二人して彼に樂園から追放され、不幸に陥らぬよう気をつけなさい。」(第20章117節) これは恩恵を求めて努力せよということである。

ムジャーヒドはそのクルアーン注釈で書いている。「生きている間はきちんと仕事をした場合以外は、パンに油をつけて食事をしてはならない。」

故事に以下のようなものがある。アーダムが大地に追放されたさい、大天使のジブラーイルは彼に小麦の耕作を命じた。そこでアーダムは小麦の種子を蒔き、水をかい、収穫し、脱穀し、臼で挽き、パンを焼いた。彼がこの仕事を終えたのはちょうど夕刻であったが、ジブラーイルはまた姿を現し、こう告げた。「お前の主は、お前に平安あれと述べられている。」またこうもいわれている。「お前が今日断食をするならばお前の誤ちは宥され、子孫を繁栄させるであろう。」アーダムはこの食物が天国の食物の味と似ているかどうか知るために、それを口にしたいという思いにかられたが、奨めのとおり断食を行なった。断食を行なう者たちが夕方一斉に食物を口にしながらるのは、これによるものといわれている。

同様にヌーフ(ノア)も大工をなりわいとして生活していた。イドリー

スは仕立屋であり、預言者の伝えているところによれば、イブラーヒームは呉服屋であったということである。「お前たちの父親は呉服屋だったのだから、その職業を継がなければならない。」ここで父親とはイブラーヒームのことなのである。またダーウドも自分の利得でなりわいを立てていた。これについては次のような言い伝えがある。彼は国民が自分についてどう考えているかを探るために変装して町に出た。そしてある日若者の姿をしたジブラーイルが彼を迎えた。ダーウドはこの男に尋ねた。「若者よ君はダーウドをどう思うかね。」すると彼はこう答えた。「ダーウドは素晴らしい。ただし一点だけ問題がある。」そこで彼が「その問題とは何か」と尋ねると、こう答えた。「彼が国庫からの収入で生活していることです。最良の人間は、自分の利得で生計を立てるものですが。」これを聞いてダーウドは居所に戻り、祈りの場所で涙しながら神に願った。「神よ。国庫の財に頼らず生活できるような利得の業をお教え下さい。」そこで神は彼に帷子の製法を教えられた。その結果彼の手は固い鉄を、まるで粉でもこねるように易々と使いこなすようになった。クルアーンには、「われは彼に帷子を作る術を教え」（第21章80節）という表現がある。ダーウドは帷子を作ってそれを売り、その代価で生活し、喜捨を行なったのである。またスライマーンは棗椰子の葉で大きな籠を作り、それで生計を立てていたといわれている。ザカリヤーは大工をなりわいとし、イーサー（イエス）は母親の織った布を売って生活をしていたといわれる。また、おそらく彼は落穂拾いをして食にあてていたのであろう。これもまた利得の一種に他ならないのである。言い伝えによれば、イスラームの預言者は羊飼いであった。彼はある時、自分の教友にこういったと伝えられている。「私はかつてウクバ・イブン・ムイトの羊飼いであった。神が遣わされる預言者はみな羊飼いである。」アッ=サーイブ・イブン・シャリークが父親から聞いたとする伝承に次のようなものがある。「神のみ使いは私の仕事仲間であった。しかも最上の仲間、へつらいもせず、いさかいもしなかった。」そこでひとが尋ね

た。「いったい二人でどのような仕事をしていたのかね。」すると彼は答えた。「皮を扱う仕事だった。」

ムハンマドが「農業の書」の中で指摘しているところによれば、神のみ使いはジャルフで農耕に従事していた。以上の事柄から利得が使徒たちの生活手段であることが知られるのである。

ところで利得には二種類がある。つまり自らを利するものと、自らを害するものである。第一の利得に携わる者は、必要かつ法的に許されたものを求める者であり、第二の利得に従事する者は不正をなす者であり、例えば盗人の場合のようにその行為によって罪ある者とみなされるのである。この第二種の行為に関しては、人々は一致して禁じられた行為とみなしている。至大なる神は述べられている。「罪を稼ぐ者は、自らにふりかかる不利を稼ぐだけ。」(第4章111節) またクルアーンにはこういう表現もある。「過ちと罪を稼ぎ出す者。」(第4章112節) そして先代、後代の法学者たちの見解によれば、第一の利得は一般的には許された行為であるが、特殊の場合には義務となる。

だが無知な禁欲者たち、愚鈍なスーフィーの徒は、必要なさい以外の利得は禁じられており、死肉を食らうのと同様に解釈されとしている。彼らによれば利得は、神への全的信頼を否定、もしくは蔑ろにするものなのである。「なんじらがもしも本当の信者ならば、神を信頼しなさい。」(第5章23節) クルアーンにもあるようにわれわれは神に全面的信頼をよせるよう命じられている、というのがその論拠なのである。

(彼らはさらに論を展開する。) ところで本来命ぜられている神への全般的信頼の否定を内に含むものは、禁じられた行為とみなされる。利得が信頼の否定につながるという証拠としては、次のような預言者の伝承があげられるのである。「もしもなんじらが正真正銘神を信頼するならば、神は鳥たちに糧を与えられたように、なんじらにも糧を授けられるであろう。朝はひもじくとも、夕にはみちたりて。」またクルアーンには、「天にはなん

じらへの糧と、なんじらに約束されたものがある」(第51章22節)という言葉もみられる。ここには利得にたいする専念を放棄させる促しがあり、同時に約束が必ず実現されることの説明が認められるのである。クルアーンには、「お前の一族に礼拝を命じ、」(第20章132節)とある。このさい語りかけられているのは神のみ使いであるが、その対象となっているのは、彼のウンマ全体である。要するにムスリムたる者は忍耐と礼拝を求められているのであり、利得に専念することを放棄して恩恵の糧を求めよと諭されている訳なのである。クルアーンには、「ジンと人間を創ったのはわれに仕えさせるため」(第51章56節)とあるが、利得に専念した場合、一族に命じよといわれた宗教的義務の遂行を放棄し、主への崇拝を忘れてそれに専念することになってしまうのである。預言者はこの点について指摘している。「私は、自分が商人の一団に加わって財を蓄えよという啓示を与えられた訳ではない。私には、『お前の主を讃えて祈念し、ぬかずく者の一人であれ』(第15章98節)という啓示が下されているのである。」さらにクルアーン中の売買に関する言及については、その真意が財の委譲や利潤といった問題ではなく、下僕が誠心誠意主につき従い、尊崇する行為を介して、主との間に行なう(精神的)商いにあるとみなしうるのである。クルアーンには、「われはなんじらに商いを示そう」(第61章10節)とか、「まことに神は信者たちから購われる方」(第9章111節)といった表現が見られる。これらの表現の意味するところは、上述のごときものである。要するに宗教のために努力を惜しまず、さまざまな服従の証を立てることによって善果をうるよう心をいたすという意味である。同様に神は自分自身を売りわたし、宗教が認めていない罪を犯して、財を獲得する例をあげている。クルアーンには、「ああなんとつまらぬもののために彼らは魂を売るのか」(第2章102節)あるいは「かれらは僅かな代償でアッラーの徴を売り」(第9章9節)という指摘が見られる。この点については預言者が言及している。「人間には二種類ある。自分の魂を売る者は身を滅ぼす者であり、

それを買取る者は自らを解放する者である。」ちなみに教友たちはたえずマスジドに身をおき、利得に専念するようなことはなかった。それゆえにこそ彼らは人々の称讃の的となっているのである。四代の正統諸カリフも、優れた教友たちも、社会的、文化的に指導的な立場にありながら決して利得に専念するようなことをしてはいないのである。

この点に関するわれわれの反論の論拠は、クルアーンの一節中にある。「神は商売を認め給うた。」(第2章275節) その他クルアーン中には、以下のような言葉が見出される。「お前たちが賃借をする場合には」(第4章282節)「互いの善意による商売の場合には(財の支出が認められる)」(第4章29節) また「それが現に行なわれる商売ならば」という表現も見られる。この種のクルアーンの章句は、商業に従事することを合法化し、ある場合にはそれを強く促すような姿勢の法的基礎となるものである。そしてこれらが禁じられていると主張する者は、このような典拠に違背することになるのである。

法と関わる言葉は、それが表現されるさいに人々が、会話において理解するような明白な意味を持つものなのである。われわれは法について、それが理解されうる限りにおいて語るのである。そして売買という語は、実際に利得の行為に携わるさいの財の移動を指している。この語は、特別な根拠が提示されぬかぎり、象徴的な意味合いでは解釈されない具体的な意味を持っている。例えば、「まことに神は、信者から購われる方」(第9章11節) というクルアーンの一節の場合は、これが象徴的な意味であることは明らかである。他の場合には、このような根拠が認められず、従って具体的な意味を持つことになる。クルアーンの一節、「なんじらは礼拝を終えたならば、大地に散り、神の恵みを求めなさい。」(第62章10節) とは具体的に商業を指しているのである。「なんじらが主の恩恵を求めたとしても罪とはみなされない、」(第2章198節) という箇所も、巡礼のさいの商売についての言及なのである。「君たちの口にする最良のものは、自らの手で稼ぎ

出したもの。先の預言者ダーウドにしても、自らの手で稼いだものを口にしていた。」これはクルアーン中の、「われがなんじらに捧げる良きものを食せよ」（第7章160節）と対応しているのである。

しかし、われわれにとっての最大の論拠は、神のみ使いたちがすべて利得に従事していたという事実にある。われわれはすでにこの点について充分説明を行なったはずであり、また誰かがわれわれに反論を試みたとしても、イーサーやヤフヤの例に照らして無益であろう。すでに述べたようにイーサーは彼の母の織った布で生計を立てていたのである。

ついで指摘すべきは、この点について預言者たちが他の場合と異なるということであろう。彼らは人々を正しい宗教に導き、それを顕彰するために遣わされた。それゆえ彼らはその目的に向かって専心し、したがってほとんど利得の行為に携わってはいない。彼らにしても若干の時間をそれに費やしはしたが、それは人々に利得が当然行なうべき行為であり、それに従事することは、無知な者どもが考えるように、神への信頼に反するものではないことを明らかにするためであった。この問題に関してはウマルにまつわる伝承があげられる。ウマルは一団のクルアーン読誦者たちの許を通りかかったが、そのさい彼らが頭を垂れて座り込んでいるのに気づいた。そこで尋ねた。「あれはいったい何者だ。」すると誰かが説明した。「あれは神を信頼する連中 (Mutawakkilūn) です。」それを聞いてウマルは言った。「連中は他人の財産を喰いつぶす穀潰しども (Muta'akkilūn) だ。私は君たちに神を信頼する者がどのような者か説明しなかったかな。」すると人々は、「はい」と答えた。そこで彼は付け加えた。「それは現世における愛を投げ棄て、至大、至高の主を信頼する者のことなのだ。」これには別の伝承があるが、それによればウマルはこういつている。「やあクルアーン読誦者の面々よ、頭をあげて自分の食いぶち位は自分で稼ぐことだ。」

われわれの論敵が、偉大な教友たちは利得に従事していないとしているのは誤った主張である。伝承によればアブー・バクルは呉服屋であり、ウ

マルは革商人で、ウスマーンは食糧の小売りを行ない、またアリーにしても一説によれば賃労働に従事し、諸説があるがユダヤ人のためにも働いたとされている。

また伝承によれば預言者は一着のズボンを2ディルハムで買い、そのさい貨幣の秤り手にいった。「少しはおまけして計るのだ。われら預言者はみなそうするのだから。」また神のみ使いは大きな盃や、鞍の下におく布を売って利益をあげていた。そしてある遊牧民から雌駱駝を買い、彼にきちんとその値段を支払った。しかしその遊牧民はそれを否認して、「それでは証人を立てて欲しい」と請求した。そこで預言者は、「誰か私のために証人になってくれないか、」と求めると、フザイマ・イブン・サービトがすぐに口を切った。「貴方がこの遊牧民にきちんと雌駱駝の値段を支払ったと、この私が証言しましょう。」そこで預言者はいった。「君は現場に居合わせなかったのに、どうしてそのような証言をすることができるのか。」すると彼は答えた。「神のみ使いよ、私は貴方が天からの伝言をもたらされたことを正しいと信じているのです。それなのにどうして雌駱駝の代金程度のことで貴方を疑うことができるでしょう。」それを聞いて預言者はいった。「フザイマが証言した者というだけで充分であろう。」

さらに「天にはなんじらへの糧と、なんじらに約束されたものがある」という一節に関する彼等の解釈にも問題がある。なぜならばここで意味されているのは、天から降り植物を育成させる雨のことなのだから。ある古老のいい伝えによれば、雨は恵み(rizq)と呼ばれているのである。「アーダムの裔たちよ、神はなんじに恵みを与え給い、なんじの恵みに恵みを、またなんじの恵みの恵みに恵みを与え給う。」この文は以下のように解釈されよう。つまり神は天より植物の恵みである雨をもたらされる。ところで植物は家畜にとっての恵みであり、家畜は人間にとっての恵みなのである。これを明らかな文意から判断すれば、クルアーン中の表現のように天にはわれわれの恩恵がある、ということになるであろう。ただし神は、このよ

うな恩恵を利得によって手に入れるためには、その原因となるものを具体化しなければならぬと命じられているのである。これについては至大、至高の主から伝えられたとされる次のような言葉がある。「われがなんじに恩恵を下すよう、下僕よ、なんじの手を働かせよ。」神はまたマルヤムにたいしても、棗椰子の樹を揺さぶるよう命令しているのである。「(棗椰子の幹を) 自分の方に揺さぶれ」はクルアーンの一節(第19章25節)である。ただし神は「ザカリッヤーが彼女を見舞って座所に入るたびに」(第3章37節) そうしたように、彼女がとりわけ努力をしなくとも彼女に恩恵を与えることもできたのである。神が彼女にこのように命じたのは、よしんば人々が神の恵み深さについて確信していたにせよ、その原因の成就を蔑ろにしてはならぬことを人間に教え諭すためなのである。

第2節 利得の位置

この問題は、ちょうど創造の問題に似ているとみなしうであろう。至高の神は創造者である。彼は創造にあたりアダム(アダム)を創った場合のように、原因も原因が宿る場も必要としなかった。ただしイーサー(イエス)を創ったさいには、原因はないがそれを宿す場があった。一般の人間の場合には、原因とそれを宿す場が必要である。これが「人々よ、われは一人の男と一人の女からなんじらを創った、」(第49章13節)といわれている理由である。ところで至高の神は結婚を薦めているが、(夫婦が)子供を求めるとしても、それで創造者が神であるという確信がゆらぐ訳ではない。ことは恵みの問題にしても同様であり、真の信頼(tawakkul)とは利得の放棄であると考える者は、(両者の間には論理的な関連はない点で誤っているばかりか) シャリーアに違背しているのである。神のみ使いは、「私の駱駝を自由にしてから神に身を委ねてもよい」といった者にたいする答えとして、「駱駝をつなぎとめてから神に身を委ねるがよい」といっている。(これは神の行為と人間の行為は次元が異なり、人間が行なうべきこ

とをしなければ、神がすべてをとりしきり、放たれた駱駝の面倒を見る訳ではないことを示している。)

これと同様の問題としては、われわれが唱えるよう命じられている祈念があげられるであろう。クルアーンには、「神に恵みを求めよ、」(第4章32節)とある。ところであらゆる者は神から約束されたものが必ず実現することを知っている。しかし誰もそれゆえに神に求め、祈念することを放棄したりはしないのである。預言者たちにしても、彼らは自分たちが死後樂園に行くことを熟知していたにもかかわらず、神に樂園行きを認めるよう求めつづけているのである。神は、すでにそれを彼らに約束し、神は「決して約束をたがえず、」(第3章9節) 彼らは彼らで罪である行為などとはまったく無縁であったにもかかわらず、なおも神に樂園行きを祈念しつづけているのである。

治癒の問題もこれと同様なものといえるであろう。治癒を行なう者は至高の神である。だが神はわれわれに薬を用いるようこう命じているのである。「神の下僕よ、薬を用いよ。至高の神は毒を除き、病いにはきちんと薬を創られているのだから。」一説によれば毒の代わりに、「老齡(を除き)」ということになっている。そして神のみ使いは、実際にウフドの戦いで顔面に傷を受けたさいに薬で治療されているのである。

この場合にしても薬で治療するという努力を行なうことは、至高の神が治癒者であるという確信を否定するものではない。これは自ら働くことによって恵みの原因を獲得することが、決して神が恩恵を下す者であるという確信を否定することにつながらないのと同様である。

スーフィーたちに関して驚くべきことは、彼らが他人が自ら稼ぎ出し、商売で儲けたもので得た食糧を、自分たちに供されているものがいかなる性質のものかを充分承知しながら、口にしている点である。もしも利得が禁じられているならば、それで得られたものを口にすることも禁じられるはずである。なぜならば、禁を犯すことと関わりのあるものは禁じられて

いるのだから。周知のようにムスリムが酒を売ることは禁じられた条項に該当するので、そのもうけを自分のものとすることも禁じられるのである。ところで、スーフィーたちの誰一人としてそのようなものを受け取って食することを禁じていないとすれば、これは彼らの無知、怠慢のしからしむるところとせざるをえないであろう。

スンニー派の諸法学者の一致した見解によれば、必要不可欠なもの（生活必需品）の利得に励むことは義務である。

ただしカッラーミーや派の主張によれば、それは容認というかたちで認められるということになる。なぜならそれは絶えず義務たりつづけるか、特定の時間の義務であるかのいずれかだからである。

ところで第一の場合は誤りである。これを受け入れれば人はつねにこの義務を行なうことに専念し、他のさまざまな義務を履行する暇をもたないことになる。

第二の場合も誤りである。なぜならば、特定の時間に義務と定められているものは、礼拝や巡礼のようにその時間と結びついている。しかし、法は利得を特定の時間と結びつけてはいないのである。

次いでそれは人間の欲望にもとづく義務であるか、必要不可欠なものにもとづく義務であるかのいずれかであると問われる。

第一の場合は誤りである。なぜならば欲望とは現世のあらゆる財と関わりをもつものであり、ひとはみなそのすべてを獲得する義務があるなどとはいえないのだから。

また第二も誤りである。なぜならば必要不可欠なもののために義務とされるものは、それを実現するさいに義務とされるが、それが実現され終わると利得の必要がない。ところでそれが義務であるという性格は、いかにしてその欠如の状態の後にありうるであろうか。

またそれに関しては、そのすべての種類が義務的とされるか、特定のもののみがそうであるかのいずれかである。

だが第一の場合は誤りである。なぜならばいかなる人間といえどもそのすべてに関与し、それを学習する余裕をもってはいないからである。そのような努力を重ねている間に彼の寿命は尽きてしまうのである。

第二の場合も誤りである。なぜならば一定の種類のものが義務的とされるさいに、それがとりわけ他より一層相応しいとはいえないのだから。

またそれはあらゆる人々に課されるか、一部のみに課されるかのいずれかである。

第一の場合は誤っている。なぜならば預言者たちは、ほとんどの時間を利得に割いていないし、また著名な教友たち、後代の選良たちにしても彼らが義務として課されたものを（利得のために）放棄したとは考えられないからである。

第二の場合も、一部の者が他の者よりこの義務を行なうに相応しいなどということがありえないため、誤りであるといえる。

以上から利得が本来の義務ではないことが明らかである。なぜならばそれが本来の義務であれば、それに専念するよう指示があった筈だからである。それが宗教儀礼に比せられる付加的な義務(nafil)であるとすれば、過度にそれに耽ることは非難のたねとなるであろう。クルアーンは、「現世とは遊び、戯れにすぎぬ、」（第57章20節）としており、（それに耽れば）「厳しい懲罰」があると述べている。この点については、これと知の追究との間には明確な相違がある。知の追究は本来義務とされており、それに専心するよう明白な指示があるのである。

（以上のカッラーミーヤ派の議論にたいする）われわれの反論の論拠は以下のごとくである。クルアーンには、「なんじらが稼いだ良きものを支出せよ、」（第2章267節）とあるが、この命令は明らかに義務的なものである。稼いだものを支出するためにはそれ以前に稼ぎ（利得）がなければならない。そしてそれを除いては神の尊崇、義務の遂行が不可能であるようなものは、とりも直さず義務そのものに他ならない。クルアーンは、「礼拝を終

えたなら、大地に散れ、」と述べているが、これはまさに利得を指すものであり、義務そのものに他ならない。

ここでもシムジャーヒドとマクフルからのいい伝え、つまり上述の表現の意味が（利得ではなく）知の追究であるという説が提出されるならば、われわれは預言者から伝えられたとされる釈義を引くことにしよう。預言者はいっている。「定め（の）札（の）のちの利得の追求は、札（の）と同様義務である。」そして上記の「札（の）を終えたなら」という節を引用している。このような観点からすればマクフルとシムジャーヒドの説は、この説を否定するほど有力ではない。例証として、われわれが引用したすぐ後に、「連中はうまい儲けを見出すと、」（第62章11節）といった表現が存在することも、われわれの説を強化するものといえよう。かつて人々は、預言者が説教をしているさいに商売を行なったことがあった。そこで彼らは商売が禁じられ、札（の）を終えたのちにそれが許されるようになった。そこである者は禁止ののちの命令は許可と認められると主張するが、われわれの主張ではそれは完全な命令である。

もしもその真意が許可、認可であるとするならば、たんに神の恵みを求めたとしてもなんじらに罪はないという結果にとどまるであろう。これに該当するものとしては巡礼の途中に関する規定、「なんじらの主からの恵みを求めたとしても、罪にはならない」があげられる。ただしわれわれの説の証明としては、神が妻や子、待婚期間中の女たちといった家庭内の者たちのために支出するよう命ぜられていることがあげられる。利得によって財を獲得することなしに家族のための支出は不可能であり、義務の遂行のために不可欠のものは義務そのものとみなされるのである。

合理的なものには証明が提示されねばならない。ところで世界の秩序は利得にかかっているのである。至高の神はそれが消滅するまで世界を存続させるよう決定された。そして存続と秩序の原因を人間の利得と定められた。したがってそれを放棄することは、世界の秩序の崩壊を意味するもの

であり、厳禁されている。ところでもしもこの秩序の存続は動物間の性的結合と関わるものであり、誰しもそれが義務であるとは主張しえないという反論があったとしよう。その場合われわれはこう答えるであろう。たしかに神は存続を動物の性的結合と関連づけ、生物の本性に欲望をうえつけられた。この欲望が人々をその種の行為に駆り立てるのであるが、それが禁じられないために人々に義務とするまでの必要はなかった。なぜなら本性そのものが欲望の充足に導く役割を果たすのだから。

ところで利得の第一歩は労苦であり、世界の秩序の存続はこれと関連している。したがってこの種の根本が義務とされないならば、人間は他人と語らってそれを放棄するであろう。人間は本来労苦を伴うものを好まないのである。したがって法はこの根本を義務とし、人々が語らいあってそれを放棄せぬよう定めた。かくして目標が達成されるのである。

上記のような細部にわたる諸見解は、預言者ムハンマドの言葉によって無効とされざるをえないであろう。彼は知の追究が義務であると同様、利得の追求も義務であると明言しているのである。人々の諸見解は知の問題をめぐるなされたものであるが、多くの論議があるにも拘わらず彼らにしてもそれが本来義務であるという点では皆が一致している。これは利得の追求に関しても同様なのである。それが義務的であるとされるのは、すでに述べたような世界の秩序の維持のために必要であるという論拠にもとづいており、資産を増やすためにそれに耽ることに根拠は求められない。神はこのような目的でなされる努力をむしろ非難されているのである。「それはたがいの間の張り合い、みせびらかしに過ぎない。」(第57章20節)

次いで以下のような事柄が問題となる。つまり必要なものを利得したのちには、さらに利得にいそむことと神の尊崇に時間を割くことのいずれが、好ましいかという問題である。

これに関してはある法学者たちは利得にいそむことを良しとしているが、多くの法学者は敬神に時を割く方が良いとしている。

第一の主張の論拠は利得から生ずる利益がより一般的であるとするものである。例えば農民が稼ぎ出したものの利得は通常多くの人々に及ぶ。だが敬神に専念する者は自分自身を利しているものであり、これを行なうことによって自らを救済し、酬いを求めることになる。ところで利益がより一般的であるものの方が一段と優れているという点については、預言者の言葉がある。「最良の人間は他者を利する人間である。」知の追究が敬神に専念することに優るとされるのは、まさにこの故なのである。前者のもたらず利益が、後者のそれより一般的であることはいうまでもあるまい。また4人の正統カリフたちがしたように、人々を公正に統治することの方が、敬神にいそしむよりも優れているということは、前者の利得がより一般的であることから明らかであろう。預言者はいつている。「敬神は10の部分からなっている。」あるいは、「神聖なる努力(jihād)は10の部分からなっている。そしてそのうち9つは許されたもの(halāl)を求めることにある。」許されたものを求めるとは家族のための支出を意味している。これを証明するのは以下のような事実である。つまり利得によって人はさまざまな帰依の行為を果たすことが可能である。聖なる努力、巡礼、任意の喜捨、両親への孝行、親族との親交、縁者や旅人たちの歓待等々。しかし敬神の行為への専念によっては若干の行為、つまり断食や礼拝しか可能でない。

ところで第二の主張の論拠は、実際にはこれの方が正しいのだが、以下のようなものである。諸々の預言者、使徒たちは、ほとんど利得のために時間を割いていない。彼らがその生涯において、もっぱら利得に専念するより敬神の業にいそしんでいたことは誰の眼にも明らかである。そして彼らが自らにより高い目標を課していたことは周知の事実であろう。宗教の高度な実践の範が、使徒たちに見出される点にはいささかの疑念もあるまい。それゆえ人々は、通常心のうちから取り除く必要のあるような事柄に出会った場合、利得の代わりに敬神にいそしむのである。彼らは利得を追いかける者の代わりに、敬虔な人々に親交を求め近づく。ところで利得の

追求は異教徒にも、ムスリムにもともに適用されるものである。しからばとりわけ信者たちだけの場合にそれを他よりも優れているとさせるものはなんであろうか。それが敬神の行為なのである。この証明としては預言者の言葉があげられる。最良の行為はなにかと問われた際に預言者はいわれた。「もっとも強力なものである。」この言葉の意味は肉体にとって一番過酷な行為ということである。つまりここでは、人間は自らを快楽から断ち切ったさいに最高の段階に達するという意味なのである。クルアーンに「自らを快楽から抑制した者は（のちに樂園を住いとする、）」（第79章40節）という一節があるように。このように努めることは第一歩であり、そのような状態が宗教的諸儀礼を果たすことによって永続する。他方利得への専心は当初労苦をもたらし、また結果として欲望を抑制し、精神の赴くべき場に到達させる。したがって当然のことながら、最初も終わりも心の求める快楽に反するものの方がより優れていることになる。

以上述べたことは結婚には該当しない。結婚に従事することは敬神に耽るより優れているが、それは次のような理由による。つまり、結婚がよしとされるのは、それによって神の下僕が増え、神のみ使いのウンマが強化され、繁栄に導かれるからである。このようなことは敬神の場合には存在しないのである。

第3節 貧困と富裕

必要なものが獲得されたのちには、敬神にいそしむことの方が利得に耽るより優れている。この問題はまた以下のような問題と関連してくる。それは貧困にまつわる特質と富裕にまつわるそれといずれが高い地位にあるかという問題である。この点については学者たちの間で意見が分かれているが、われわれの学派では貧困の方が上位に立つとされている。ある法学者は富裕の方が上であるとしているが、ムハンマドは「利得の書」の中の二箇所て筆者が述べたようなわれわれの学説について指摘している。その

第一の場所で彼は述べている。もしも人間が十分に満足しうるものをかちえて、それ以上は余分という境遇に達したならば、かれらの生活を来世のことがらに向けさせるべきである。これは、彼らにとってより良いことなのだから。また他の場所ではこう書いている。人間の必要以上の稼ぎは(来世で)きちんと計算されるが、貧困に関してはその限りではない。そしてそれにたいして計算がなされるものとそうでないものとを比べた場合、後者が優れていることは疑いの余地がない。

他方富裕が優れているとする者はこう主張している。富裕は恵みであるが、貧困は不運、逆境、試練である。知恵ある者にとって恩恵の方が逆境、試練よりも優れていることは紛れもない事実である。この証明としては神が財を恵みと呼んでいること、クルアーン中の諸節、「神の恵みを求めよ」(第 62 章 10 節)、「なんじらの主の恵みを求めることは罪ではない」(第 2 章 198 節)があげられる。神がよりよしとされたものは一段と高い地位にあり、それゆえ財は良きものと呼ばれているのである。クルアーンにはまた「もしも財産を残す場合には両親に」(第 2 章 180 節)という一節もある。これはあきらかに富裕が貧困に優ることを示しているのである。クルアーンはまた「われらはダーウドに恵みを与えた。」(第 34 章 10 節)とあるが、この場合恵みとは領土または資産の意味である。伝承によれば彼は百の軍団を所有していたが、神は彼にこれを与え、それを神からの恵みと呼んでいるのである。またスライマーンは神に恵みを求め、こういつている。「主よ(われをゆるし給え)そしてわたしの裔の誰一人として困らぬような財を与え給え。」(第 38 章 35 節)

ところでみ使いたちの誰一人として、高貴なものをさしおいて卑賤なものを授かるよう神に求めるなどということは考えられない。この証明としては預言者の言葉があげられる。「手には三種類がある。つまり神の手と与える手、受け取る手である。そして受け取る手は最後の審判の日にいたるまでもっとも卑しい。」また他の伝承は、上の手は下の手よりも優れてい

る。」としている。上の手とは与える手のことなのである。またサアド・イブン・アビー・ワッカースに述べた預言者の伝承には次のようなものがある。「遺産の相続人を豊かな者に指定する方が、他人にもの乞いする貧乏人に指定するより好ましい。」またアブー・バクルは病いの床にあってアーイシャにいつている。「私は貴女が豊かであることを望み、貧乏であれば心いたむであろう。」これは豊かさが貧しさより優れ、高い位置にあることを示すものであろう。伝承にはさらに次のようなものがある。「貧しさはほぼ不信に近い。」「神よ、私は是非とも貴方のため以外の貧乏から逃れたいものです。」また「神よ私は不幸、あるいは不幸をよそおうことから逃れたいものです。」ここで不幸とは貧乏の意であり、不幸をよそおうとは貧乏をよそおうことに他ならない。ところで預言者が位の高いものから逃れたいなどと望む訳もないのである。

次いで貧乏が信者たちにとってより健全で、より健全であるものは人間にとりより高い地位にあるという点を明らかにしよう。この証明となるものは、金持の不正よりも貧困がより健全であるとされている点である。クルアーンには次のようにある。「いや人間はまことにのりを越える者。」(第96章6節)「郷里においてのりを越えた者ども。」(第89章11節) ところで人々をこのように誘うのは金持の逸脱なのである。つまり彼らは他の人々のためにではなく、自分自身のために富を手にするに明け暮れる。しかし貧乏人がこのような状態になることについては一切指摘がない。これは貧しさがより健全であることの証拠であろう。豊かさとは人間の魂がこれに魅かれ、本性がそれを求め、結局快樂の享受を伸だちすることになるが、貧しさに関してはこのようなことはなく、快樂の享受から遠いだけ高い地位にあるといえる。クルアーンには次のような指摘がある。「彼らは快樂に耽ったので、やがて破滅することになろう。」(第19章59節)「快樂の追求は人々に甘美に映ずる。」(第3章14節) そしてこれを多くの伝承が証明している。「樂園はいとわしいもので、地獄は快樂で囲まれてい

る。」「信者にとって、貧しさは花嫁の頬を飾る黒子よりも美しい。」「わがウンマの貧しき者は、富める者より半日早く樂園に入る。それはこの世の500年に相当する。」また古人の言葉にこうある。「数ある預言者たち——神よ彼らに平安を与え給え——のうち樂園に最後に入るのはスライマーンである。それは彼の財産のゆえである。」また次のような伝承もある。「預言者はある日アブドゥッ=ラフマーン・イブン・アウフにいった。『アブドゥッ=ラフマーンよ、君はなんと私についてくるのが遅いのか。』そこで彼は答えた。『神のみ使いよ、それはいったいなぜでしょう。』預言者はこう言葉をついだ。『最後の審判の日に君は私の教友たちのうちで一番遠くにいることになるだろう。』彼は尋ねた。『私の障害となっているのはなんでしょう。』すると預言者はいった。『財産だよ。君は今にいたるまで好ましくない金を貯めこんでいる。』」ところでアブドゥッ=ラフマーンは、神のみ使いが必ず天国に入ることを保証している10人のうちの1人に数えられる人物なのである。彼は自分の財産を4回にわたり神に捧げている。その方法は私財の半分を喜捨し、半分を手許に残すというやり方であったが、第1回目は総額8千ディルハムのうち、4千ディルハムを喜捨している。第2回目も総額は8千ディーナールであり、4千ディーナールを喜捨した。第3回目の総額は1万6千ディーナールでその半分以上を喜捨し、第4回目は総額3万2千ディーナールで、その半分以上が喜捨された。それにもかかわらず預言者は彼にたいして以上のようなことを述べているのである。これは貧しさがより好ましいことを示す証拠であるといえよう。預言者はこういつている。大地の宝庫の鍵が私に示されたが、私は天使ジブラーイルにそれを断った。すると彼は私に同意した。そこで私はこう述べた。「私はつましい預言者の下僕で、ある日は飢え、ある日は満ち足りています。そして飢えた時には耐えしのび、満ち足りた時には感謝します。」また以下のような伝承もある。「神よ生を給う時には貧しく、死を給う時にも貧しく、復活の日にも貧者たちの一団の中にいさせて下さいませよう。」ところで預言者が自ら

高い地位にあるよう祈願していることは疑いない。したがってみ使いが自分のために祈ったことの方がわれわれにとってもより好ましいといっているのである。伝承には次のようにある。「私は預言者の性を君たちと共に分かち合い、君たちは私とともに共同体の一員である。」ここにはわれわれが彼の態度、導きにしっかりと従うべきであるという指示がある。

上述のことから預言者が一般的な貧しさについてではなく、神を忘れさせるような貧しさから逃れたいとしている点が明らかであろう。それは次のような伝承からも明らかなのである。「神よあなたを忘れさせるような貧しさ、のりを越えた豊かさから逃れさせ給え。」そのさい問題はある場合に限定され、その場合についてのみ言及されているのであり、この例もそれにあたるが、ある者がそれを一般的なものと誤解し、そのように伝えてしまったのである。

この問題は学者たちが意見を異にしている他の問題に立脚している。それは豊かさにたいする感謝と、貧しさにたいする忍耐といずれが良いかという問題である。学者たちはこの点について四つの異なった見解をもっている。

ある者は古人たちの意見がまちまちであるため、それに解答を寄せることを敢えてしない。彼らはいっている。「アブー・ハニーファは多神論者の子供たちに関しては、古人たちの意見が分かれているために敢えて判断を下してはいない。この先例に従って、この問題にも多くの意見があるため判断を停止する。」

他の者たちは両方が対等であると主張し、次のような伝承を証明として引いている。「食足りて感謝する者は、飢えて耐える者に等しい。」なぜならば至高の神はその書のうちで、二人の下僕をともに良き下僕とほめ讃えているからである。一方は幸福を授けられ、感謝の念を忘れないスライマーンであり、この点に関して至高の神は「われはダーウッドに授けものをした」(第38章30節)とも述べている。他方は不運に見舞われながら耐え

忍んだアイユーブであるが、クルアーンには以下のように述べられている。「われらは彼を耐え忍ぶ良き下僕とみなす。」(第38章44節) 以上によって両者は対等であるとみなしうるのである。

また他の者たちは豊かさにたいする感謝が上であるとして預言者の二つの伝承を引いている。「神への感謝はあらゆる恩恵に相当する。」「もしも全世界が一つの小さな塊になったならば、下僕がそれを飲みこんでからいであろう。讃えあれ万世の主。その与えられたものはそれ以前に与えられたものより遥かに優れている。」つまり至高の神を讃える言葉に含まれるものによって優れているという意である。

第一の伝承は、感謝が神の讃嘆にあるゆえにそれが忍耐に優ることを明らかにしているのである。その証明として次のような神の言葉が引かれる。「ダーウードの一族に感謝せしめよ。」(第34章13節) 感謝はあらゆる服従を代表するものである。ただし服従を代表するものと、それが可能であるにもかかわらず神の意に反する行為を行なわないこととは同位にあるとみなされる。ところで貧困に耐えることは(元来豊かさを享受する可能性をもたずに我慢するにすぎないので)一段下位にあると考えられる。

ところで我々の主張するところによれば、貧しさを耐えることの方が優れている。伝承には、「忍耐は信仰の半分」とか、「忍耐と信仰との関係は頭と肉体のそれに等しい」という言葉がある。貧困には試練という意味があり、試練を耐え忍ぶことは恩恵への感謝に優っているのである。これはあらゆる試練に通用することであり、したがって病の痛みに耐えることは肉体の健康を感謝することより大きな報酬がある。また盲目の境遇に耐えることは、授けられた視力について感謝することに優っているのである。神に嘉されることとして預言者はこう伝えている。「両の眼を奪われてなおそれに耐える者の報奨といえば、天国以外にはない。」また「天国と視力」に関する他の伝承もある。(「両の眼を奪われた者は、代わりに天国行きを許される、」という意味のものである。) これは貧困ゆえに授かりものを得

ることをさしている。その意味するところは、信者にとっては災厄の中にも報奨があるということで、これについては次のような伝承がある。「信者にとってはあらゆるものに、足にささった棘にまで報奨がある。」他の例としては次のような故事があげられる。マーズは高熱に見舞われたさいに（聖戦の義務をさけて）逃亡した。彼はそれゆえにかなり精神的に悩んでいたが、それにもかかわらずみ使いは彼について述べている。「彼は悔悟した。彼の悔悛を地上のあらゆる人々に分け与えたら、彼らのすべてにゆきわたるであろう。」このことから災厄の中にも信者には報奨があり、それを耐え忍ぶことにも酬いがあることが理解されるのである。

ところで豊かさ自体には報奨はなく、それは豊かさを感謝することのうちにある。そして二つの側面から報奨がえられるものは、一方からのみそれがえられるものより高い地位にある。豊かさにたいする感謝の中には神への讃嘆があり、災厄にたいする忍耐もクルアーンに「災厄に見舞われた人々」（第2章156節）についての指摘があるように同様であるといえる。（ただし豊かさそのものには貧しさのような報奨はない。）言い伝えによると金持と貧乏人がこの問題について議論した。金持の言い分では、感謝にことかかぬ金持の方が上である。なぜならクルアーンに「神に貸与を行なった者は」（第2章245節）とあるように、神は金持が貸与することを期待しているのだから。ところで貧乏人はこう反論している。神は貧乏人のために金持に貸与を期待しているのである。彼は自分の愛する者からでも、そうでない者からでも貸与を期待することができるが、その目的は愛する者（貧乏人）のためである。

論点を整理すると次のようになるであろう。金持は財産を正当化するために貧乏人を必要とするが、貧乏人の方は金持を必要としてはいない。もしも一群の貧乏人にたいして金持の財を受け取ってはならないと定められた場合、彼らはその受取りを強制されず、受取りを禁じた法に満足するであろう。金持は自らに課された義務を怠ることができないが、他方貧乏人

はそれぞれに保証されたものによって十分に自足しうるものを与えられているのである。これによって事柄の表相のみを追い、その深い意味を考察しない者の意見とは異なり、金持は貧乏人を必要とするが、貧乏人はその限りでないということが明らかになるのである。以上によって既に述べたように、忍耐にいそしむ貧者が感謝する金持よりも優れており、あらゆる場合に上の地位にあることが明らかにされた。

第4節 利得の諸段階

ところで利得には多くの段階がある。各人にとって必要な財、つまり一家を養うに相応しい額は、本来それぞれが稼ぎ出す必要がある。なぜならばそれなしには、さまざまな義務を遂行することが不可能だからである。義務の遂行を可能にするものはまた義務にほかならない。それ以上を稼いでいない者は、その範囲内にあるのである。伝承には、「日々の糧をえて飢えを知らず、託された秘密を守り通す者には、現世の万事が順調である」とある。また預言者はイブン・フバイシュを喩して述べている。「飢えを満たすほどの食糧、恥部を覆うほどの布、身を置くに足りるほどの場所で充分である。おまけに自分が乗りまわす動物がいればいうことはない。」以上は借財がない場合のことであるが、借財があればそれを返済するに足りるだけのものを稼ぐことは義務である。借財の返済は債務者に課せられる当然の義務だからである。伝承は、「借財は清算さるべきもの」としており稼ぎによってしか清算されえない。事情は彼に妻や子がある場合にも同様である。彼らが十分に生活しうるよう利得にいそしむことは、彼の義務に他ならない。自分の妻のために支出するのは彼の義務であるがクルアーンは「彼女たちをあなた方の暮らしている所で、あなた方の能力に応じて住ませよ。」(第65章6節)と述べている。その意味するところは心から彼女たちのために支出せよということなのである。同様にイブン・マスウードの読み方に倣って引けば、クルアーンには、「父親は乳児の食料、衣類に関

して母親に公正に支払わなければならない」(第2章233節)とある。また「資力の乏しい者には、神が彼に与えたものから支出させよ」(第65章7節)という一節もある。このような要請を課するためには利得が必要なのである。預言者はいっている。「自分を頼る者を満足させられぬ男は、罪を犯した者に等しい。」そして罪を犯すことから身を守るとは義務なのである。伝承は述べている。「お前はお前自身にたいして権利をもっている。あらゆる権利の所有者に相応しいものを与えよ。」ただしこれは、義務としてみればそれだけで終わるものではない。伝承は述べている。「次いで自分を頼ってくる者を。」なぜなら第一に必要なもの以上の利得は、自分自身ないしは身内の者のための貯えとなるが、それはまた同様に第一に必要なものの範疇に入れられる。これについては預言者が、初めに貯えを禁止したのち、こう言及している。「身内のために貯えるのは法に適った行為である。」また次のような伝承もある。「預言者はピラールにいったことがある。『ピラールよきちんと支出しなさい。しかし倏約することで神を恐れてはならない。』」この言葉は先の貯えの禁止を否定しているのである。

老齢の困窮した両親がいる場合、彼らを養うために稼ぐことは義務である。利得が可能な場合、家族同様彼らのために支出することは義務とされるのである。伝承には次のようなものがある。「預言者は、彼の許にやってきて聖戦に参加したいという旨を伝えた男に尋ねた。『君には両親があるかね。』男はうなずいた。すると預言者はいった。『彼らのために帰りなさい。聖戦はあとでよい。』」つまりまず稼ぎ、それから支出せよということである。クルアーンには、「現世では彼らに手厚く仕えよ、」(第31章15節)とある。自分で稼ぐ能力があるにもかかわらず、両親を飢えて死なせるような態度は、決して手厚く仕えることではない。ただしこれは義務の点で上述のものの後にくる。それは以下のような伝承にもとづいている。「ある男が神のみ使いに尋ねた。『私は1ディーナールもっていますが。』するとみ使いはいった。『それは自分のために使いなさい。』男はまたいった。『私は

ほかにも1ディーナールもっています。』み使いは答えた。『それは家族のために使いなさい。』男はさらに言葉をついだ。『実はもう1ディーナールありますが。』そこでみ使いはいった。『それは両親のために使いなさい。』

両親以外の婚姻の禁じられた親族に関しては、彼らのために支出する目的で利得が義務づけられることはない。なぜならば余裕がある場合を除いて、彼らのために支出する義務がないからである。ただし血縁者たちのために稼いで支出することは、彼が法的に彼らの代理人たりうる資格があるので、代理者の立場からの援助と解釈される。伝承は述べている。「財を親族に与え、それで客人をもてなし、友人を厚く遇さないような男にはなんの見所もない。」また預言者は、アムル・イブヌ=ル=アースにいつている。「財を求める欲望を持つことだ。」と同時にアムルは預言者の言葉として伝えている。「善良な人間が縁者に与える良き財のなんと素晴らしいことか。」親族との縁を絶つことは禁じられているが、これについての伝承には次のようなものがある。「玉座を飾るものとして三つのものがあげられる。それは恩恵、信託、血縁関係である。ところで恩恵の反対はこういうことだ。『私は恩義を無視し、感謝などしない。』また信託の逆は、こう述べることだ。『私は預かり物をしたが返さない。』血縁関係をないがしろにするものは口にする。『私は縁を絶ち、関わりをもたない。』」また伝承には次のようなものもある。「血縁関係は生活によりよいものを加える、だがそれを絶てば生活から恩恵をとり除く。」他の伝承は至大至高の神とそれとの関わりについて述べている。「われはラフマーン（慈悲深き者）であり、それ（血縁関係）はラフムである。われは自分の名にちなんでその名を与えた。それゆえその関係を保つ者とはわれも関わりをもち、それを絶つ者とは関わりを絶つ。」したがって縁者たちに支出しないような態度は、結局彼らと関係自体を絶つことにつながる。それゆえ彼らのために支出すべく利得にいそしむことが奨励されるのである。これ以上の事柄については、問題がきわめて広汎なために論じない。要するにひとはそう望む場合には稼いで蓄財

にいそしみ、他の場合にはそうしていない。先人たちにしても蓄財する者、そうしない者とまちまちである。それゆえいずれの場合も法に適っているとなしうるのである。

ところで蓄財に関しては以下のような伝承がある。「慎ましく、法に適ったやり方で現世を求める者には、至高の神が対面され、その時彼の顔は満月のものであろう。だがひたすら蓄財に心がけ、驕りたかぶって現世を求める者にたいしては、神は怒りに満ちて対面されるであろう。」これは慎ましく蓄財することが合法的であることを示す言葉である。また預言者は神への祈願のさいにこう口にしたといわれている。「神よ、年老いて生命を終えるさいに最大の富を与え給え。」そして彼は実際に晩年に富裕になり、ファダクやハイバルでは40頭の乳牛を所有していた。

また蓄財の禁止については、アーイシャが神のみ使いの言葉として伝えている伝承がある。「人間は二つの谷一杯の黄金を持っていたとしても、三つめの谷を求めてやまないであろう。だが彼の腹を満たすものは塵あくたにすぎない。神は改悔する者を宥し給う。」一説によればこの言葉は(礼拝のさい)第二もしくは第三ルクーウのさいにユーヌス章の一節として唱えられたものであった。しかしのちに廃棄され、預言者の伝承にとどめられている。他にも多くの伝承がある。「財産は腐ってしまえ。」「金銀の持主よ腐ってしまえ。」「蓄財に専念する者は、自分の富で、あれこれと指示する者以外は身を滅ぼす。」これは広くあちこちに喜捨する者以外はという意味である。「悪魔はいつている。『以下の三つのうちどの一つにでも該当する富の所有者は、私の手から逃れることができない。第一は私がそれを美しいものと思いこませると、際限なく蓄財に耽るような者。第二はそれを価値のないものと思いこませると、際限なく他人に与えてしまう者。第三はそれに愛着をもたせると、そのうち神の権利に属するもののことを否定してしまう者。』」以上の諸例は蓄財の禁止の方がより健全であることの証明といえよう。安全な道を選ぶ者に欠陥はないのである。

次いでムハンマドは、利得のうちには神への近づき、従順さの助けという意味が含まれることを説明している。例えば縄を編んだり、さまざまな水がめを作ったり、織物をあむといった利得のための労働ですら、従順さ、近づきの助けとなるのである。礼拝をするためには浄めが必要であるが、それにあたっては水を汲み上げるかめや縄を欠かすことができない。また礼拝にあたっては恥部を隠さなければならないが、それは織物の仕事によって可能となるのである。このようにこれらすべての仕事は神への従順を具体化するための協業という項目の中に入れられるものである。この点についてはアリーがいつている。「現世を呪ってはならぬ。信者にとって現世とは、なんとよい来世へののりものであろうか。」またアブー・ザッルは、ある男が信仰の行為に次いでもっとも良い行為とはなにかと尋ねたさいにいつている。「礼拝の次にパンを食べることだ。」それを聞いて男が啞然とした調子で彼を見つめると、言葉をついだ。「パンがなければ神の下僕がいなくなるではないか。」これはパンを口にすることにより子孫が維持されるという意味であり、これもまた従順の具体化のうちに数えられるのである。

法学者はすべて公式に、あらゆる利得のための労働を等しく合法的であるとしていつている。ある種の禁欲主義者の主張するところでは、慣習的に賤しい職業とされているものについては、必要のさい以外には手をそめてはならない。その理由としては次の伝承があげられる。「信者たるものは自らを卑しめてはならない。」「至高の神は位高きものを賞で、下賤のことに憤りたまう。」下賤のこととは、その卑しのさゆえにひとを貶めるようなものである。

この点についてのわれわれの論拠として、次のような諸伝承を引いておく。「神のみ使いはいつている。『罪の中には、断食も礼拝も（単純にそれを）不信だと決めつけられないものがある。』それについて尋ねられると、み使いは答えた。『生活の糧を求める欲望だ。』」「許されたものの追求は、勇者たちのたたかいのようなもの。それを求めた者には宥しがある。」「最

良の行為は、身内の者を養うために稼ぐこと。」「そのための稼ぎの種類の優劣は問われないのである。その場合物乞いをやめて禁欲する以外にないとしたならば、それが良いとされる。なぜならば伝承は、「物乞いは最後の稼ぎ」と伝えており、物乞いする者は審判の日まで卑しめられるのである。また神のみ使いはハキーム・イブン・ハッザーム、もしくは他の者にいったと伝えられている。「たとえ賤しい仕事であろうとも、自ら稼ぐことは、承諾するか、拒絶するか分らぬ人々に物乞いするよりはましである。」卑しさとは、一般の認めるところでは、稼ぎのうちにあるものではなく、裏切り、約束の違背、虚偽の誓言、吝嗇といった事柄に付帯するものなのである。

第5節 利得の種類

利得は4つの種類に分類される。つまり賃貸 ('ijārah)、商業 (tijārah)、農業 (zira'ah)、工業 (ṣina'ah) である。

ある者は農業が卑しいものであると主張して伝承を引いている。「預言者は民家におかれた農具を見ていった。『このようなものが家にあっては、人々に卑しめられるだけであろう。』また預言者は、クルアーンの『もしも君たちが不信者につき従うならば、彼らは君らにきびすを返させるだろう、』(第3章149節)という一節について質問をうけ、『それは砂漠に住む (ta'arrub) ことですか。』と尋ねられた。そこで預言者は答えた。『そうではない、農業のことだ。』』ところで前出の ta'arrub とは砂漠に住んで、ヒジュラに加わらなかったことをさすものである。またアブドッラーフ・イブン・ウマルは述べている。「金を貰って忠誠の誓いを立て、雌駱駝の尻尾を購ったとすれば、身を卑しめて他人の好餌になるばかりである。」

この点についてのわれわれの論拠は次のような伝承である。預言者はジャルフで耕作にあたっていた。そうしてこういった。「農耕に従事する者は主と商いをする者である。」ちなみに彼はファグタとハイバルに農地をもつ

ていた。そして晩年にはこれらの地の産物を自分の食にあてていた。またウマルはシャムウと呼ばれる土地をハイバルに所有していた。同様にイブン・マスウッド、ハサン・イブン・アリー、アブー・フライラはサワードの地に農地を持ち、そこで耕作をさせて土地税をとっていた。イブン・アッバースにしてもサワードやその他の地に農地をもっていたのである。

伝えられた故事の真意は次のようなものである。もしもあらゆる人間が農業に従事し、聖戦に赴かないとすれば、結局、敵の好餌になるばかりであろう。この点は次のようなイブン・ウマルの言葉に要約されている。「聖戦を避けて座視すれば、身を卑しめて他人の好餌となる。」¹だがある者が聖戦に従事し、他が農業にあたれば、農事は聖戦にいそむ者の助けとなり、聖戦は農地を防衛する。伝承にあるように、「信者たちは大きな建物のように、たがいの部分はしっかりと結びつけられている、」のである。

ある長老たちは商業と農業に関して意見を異にしている。ある者は商業を一段上として、クルアーンを引いている。「またある者は地上を旅し、」(第73章20節)ところでこの部分の *darb fi-l-'ard* (地上を旅すること) という表現は、商業を意味している。そしてこれを宗教にとってきわめて重要な聖戦より先にあげているのである。(クルアーンのこの部分は、「またある者はアッラーの恩恵を求めて地上を旅し、ある者はアッラーの道のために聖戦にたずさわる、」とある。) これにもとづいてウマルはいつている。

「私にはアッラーの恩恵を求めて地上を旅して死ぬ方が、アッラーの道のために聖戦に参加するより好ましい。」また別の伝承は伝えている。「忠実な商人は、最後の審判の日に廉直で、寛大な人々の一群にいる。」ただしより多くの長老たちは、そのもたらす利益がより広汎であるという理由から、農業を商業の上においている。なぜならば農業は子孫の維持に役立つものを生産し、それによって従順さが強化されることになるが、商業はこのような生産を行わず、財を増すばかりなのである。伝承はいつている。「最良の人間は、人々にもっとも多くの利益をもたらす者。」それゆえ有益

さにおいてもっとも広汎な職業につくことが、もっとも良いといえる。なぜならば農業のもたらす物質的施しはもっとも明瞭なものだからである。人間や獣、鳥は農民の稼ぎだすものを食糧とするが、それは彼が行なう喜捨とみなしうるのである。伝承は伝えている。「ムスリムが植える樹から人間、獣、鳥たちが糊口をしのぐが、それは彼の行なう喜捨にほかならない。」また次のような言い伝えもある。「鳥がそこから食するものは、鳥にたいする喜捨である。」ここで馬を指す言葉として‘āfiyah という表現が用いられているが、これは厳密には巢に餌を持ち帰るため、食糧を探し求めている鳥をさす。同時にこの言葉は通常人間をさす場合もある。

ところで喜捨性のない利得には優越性は存在しない。例えば織物についても、それが礼拝の遂行を助けるものであっても、そのような判断がなされるのである。これにより喜捨性のより多い利得が、より優れていると了解される。

第6節 知の追究

これに関連する解釈の例として、次のような故事があげられる。マクフルとムジャーヒドの説によれば、*ḍarb fi-l-'arḍ* (地上を旅すること) という表現は実は知の追究をさすものである。ムハンマドもこれに関して次のように言及している。「学問を追究することが義務であるように、利得を求めることも義務に他ならない。」ところでこのような類比的表現は、学問の追究が義務として利得の追求に勝ることを示すものであろう。学問追求の義務に関しては、預言者の伝承がある。「学問の追究はすべてのムスリムの義務である。」ここで求められているのは状況的知である。これは最高の知は状況的知であり、最良の行為は状況の保持にある、という格言にもとづいている。これをさらに説明するならば、人がある状況においてあることを行なう必要がある場合、そのこと自体について熟知しなければならないということなのである。例えば礼拝を行なう場合には浄めが必要であり、

商業に従事しようとするならば、利得や不正な金銭的收益を避ける手段について知っておかなければならない。また財を手にした場合、それを使うためにはザカート分の勘定についても知っておく必要がある。さらに巡礼を行なうさいにはその細則を知っていなければならない。これが状況的知の意味であるが、これは神が最後の審判の日までシャリーアが存続することを定めていることにもとづいている。これが人々の間に存続するためには学習と教育が必要であるが、そのためにこの二つは義務とされるのである。この点については利得の義務について述べたさいに言及した。以上の証明としてはまた預言者の伝承があげられる。「人々の知を向上させるために他人に教えたり、他人から学ぼうとしない者たちは呪われよ。」「神がめしあげる時には、知を心からとりあげたりせずに、学者たちをとりあげる。学者たちがいなくなれば人々は無智な者を首長に選び、無知のまま法的裁定を行なうであろう。かくて自ら迷い、他人をも迷わせることになる。」以上のすべてを支持する論拠としてはクルアーンの一節がある。「もしも多神教徒があなたに保護を求めてきたならば、保護し、神の言葉を聞かせ、その後彼を安全な場所に送ってやれ。」(第9章6節)ここには不信者が求めた場合、彼を教育する義務が指摘されているが、それに先行するのは信者の教育である。

これに関しては次のような説明をしておこう。もしもひとが一生学習、教育にたずさわった場合、主要な義務を完全に果たしたことになる。もしも一生礼拝と断食に費やすとすれば、任意の行を部分的に行なったにすぎない。だが義務の遂行が、任意の行を満たすことより上にあることには疑問の余地がない。

知の探究が義務であるように、他人に知を伝達することも義務であるといわれる。人々がそれにもとづいて行為すれば正しく、それに違背した場合正しくないといった事情があれば、これは当然のことである。したがって教育はその正しさが認められ、いかなる欠点もない行為である。クルア

ーンには次のような一節がある。「あなたがたは人類に遣わされた最良の共同体である。」(第3章110節)

ただし細部に関しては異論もある。それは若干の規定を学習することに関連している。つまりそれらについて知っている者は、知らぬ者に説明する義務があるか否かという点である。これについてある長老はそれが義務であるとしているが、多くの者はそう考えていない。その義務があるとされるのは、人々がその言葉に大きな信頼を寄せているような、学識において高名な者の場合に限られる。ちなみに原書においては2つの説が言及されているが、ここで指摘された点は一般的に適用されるべき性質のものである。

これについてはさらに言及がある。知的に優れた学者たちには、人々に法的規定が定められる道筋を説明する義務があるといわれている。これは学識で世に知られた者には、特別な義務があることの証であろう。

ところで第一の説を補強するものとしては、次のようなクルアーンの諸節がある。「およそわれが下した明証と導きを隠す者たちは、」(第2章159節)「神が啓典を下された民に『あなた方はこれを人々に説明して、隠してはならない。』と約束した時のことを思い起こせ。」(第3章187節)以上二つの章句から隠蔽が不法であり、その反対、つまり明示が義務とされることは明らかである。そしてこれは知識を獲得した者のすべてに適用される。したがって知的に獲得したものの隠蔽が予測されるさいには、それを明示することが義務づけられる。預言者の伝承は述べている。「自らの知識を隠す者は、審判の日に劫火で責められるであろう。」また他の伝承は述べている。「このウンマの最後を見たら、最初が非難されるであろう。それゆえ知を獲得した者は、それを明らかにしなければならない。なぜならば知を秘匿する者は、すでに神が預言者ムハンマドに下されたものを隠す者に等しいのだから。」知を教授することはザカートを支払うと同等の地位にあるが、人にはみな財に応じてザカートを支払う義務が課されているのである。

そのさいザカートを支払うほどの財を所有する者と、それを受け取る者は対等である。

他の説の主張は以下のようなものである。学者とは、伝承に「学者は預言者たちの相続人である、」とあるように、いつの時代でも使徒たちの代理者である。そしてみ使い（ムハマンド）の在世中には、人々が宗教について知りたいことを説明するのは彼自身であった。神はみ使いについてこう述べているのである。「かつて人々に下されたものを彼らに説明するために。」（第16章44節）そして彼の存命中には、彼以外にこの種の説明を行なう義務を課された者はいなかった。むしろ事情はつねにこの通りなのであり、ただし彼の代わりに知の伝承の役割は、一般の人々ではなく、学識の高さで世に認められた者の責任となったのである。なぜならば通常人々は、識者として名声の高い者の意見を尊重し、それ以外の者の考えを充分受け入れようとしない。またある者は名声のない者の見解を耳にしても、それをしばしば軽視しがちである。それゆえ説明はとりわけ高名な人々にとっての義務と限定されるのである。アル=ハサンの言葉には次のようなものがある。「私はバドルの戦いに参加した70人の古参の教友を知っているが、彼らはすべて控え目な生活をし、人々に教えるようなことをしていなかった。」それというのも教育は、彼らの義務ではなかったからに他ならない。この点は第二世代の学者たちにしても同様で、彼らのある者は法的裁定を行なったり、教育に従事しているが、他の者はそのようなことをせず、知識をもったまま慎ましやかな生活を送っている。なぜならば彼がそうしなくとも欠陥は生じなかったし、求められる情報は、他の者によってえられたからである。これは知に二つの成果があることに由来している。それは知自体と教育である。人々のうちには二つの成果をわがものとし、知と教育の両方を兼ね備える者がいる。またある者は両方を手に入れず、知自体の成果で満足する。このようにその意味するところは広汎であるが、求められる情報は著名な学識者を介して獲得されるのである。ところでもし

も知の探究が義務でないとするならば、人間は罪から逃れることが不可能であろう。罪を犯すことを回避することもまた義務なのである。クルアーンには、「またわが主は悪業を禁じ給う、」(第7章33節)という一節があるが、罪を回避するには知による以外はないのである。

もしも人々が知の探究をないがしろにすれば、正邪真偽を分かち、寛大さと敵意といった区別がつかなくなるといわれている。正邪の区別は宗教の基であるが、それを可能にするものは知に他ならない。クルアーンには次のような章句がある。「神は虚偽を抹消し、真理を確立する。」(第42章24節)「神は真理を真理とし、虚偽を虚偽として立証する。」(第8章8節)ここで疑いのない点は、呼びかけを受けているあらゆる者に、神が正しいものとした真理と、神が打ち消した虚偽とを区別する義務があるということである。同様にすべての者は、誠心誠意正しいものに執着し、誤りを回避するためにそれを可能にする知の獲得にいそまなければならないのである。

したがって学者たる者にとっては、先人から人々にとって有益なものを受けついでさいには、つまりそのような故事を耳にしたさいには、それを説明する義務があるのである。預言者はいつている。「われらの言葉を耳にし、そのままを記憶して、それを聞き及ばなかった者に伝える貴人たちよ、神が彼らに繁栄を与えられんことを。多くの者が法の規定をそれに精通しない者に伝え、また多くの者がそのような規定をその学に一段と精通した者に伝える。」また次のような諸伝承がある。「聞き、聞かれ、聞き及んだ者に耳を傾けさせる。」「見聞した者は、不在の者に告知知らせよ。」

人々にとって有益な情報を説明することは義務である。これに該当するものは、先行の矛盾した言明を破棄するクルアーンの正しく、著名な章句である。他方破棄されたものについては、伝え知らせる必要はない。またこれは一般的に重要な情報についても妥当するものであろう。もしもそれを伝えることが人々にとって益がなく、むしろ内紛を呼び起こすような性

質のものであるとすれば、内紛を回避するよう配慮する方がよいといえる。その論拠となるのは、アブー・フライラの言葉である。「もしも君たちに私の耳にしたことをすべて語ったならば、君たちは私に石を投げかけるであろう。」ところでムアーズは信仰告白に関する伝承を耳にしていた。しかし彼は死の直前までそれを他人に伝えなかった。そして最後に友人に告げている。「私は神のお召しが多かったならば、これを君たちに伝えなかったであろう。これは神のみ使いから聞いた話だが、『アッラー以外に神はなしと心から証言した者は樂園に入る、』というものである。」しかし彼はその信憑性に関して、簡単に人々がこれを信用することを慮って、それを伝えることをしなかった。そして死が間近であることを悟ったさいに、初めて友人たちに伝えたのである。その結果われわれの論拠としてこれが用いられている次第である。

もしも伝え知らせることがわれわれの義務でないとすれば、知の伝達に関して同じ規則が適用され、先人たち、つまり教友や第2世代にも適用することになる。だが預言者の伝承には次のようなものがある。「この教えを正しく後代に告げ報らせよ。誤謬の徒のあやまち、無智の徒の曲解を避けて。」このようにもしも後代の者に伝達の義務が解除されるならば、先人たちにもそれが認められ、結局ラワーフィド派の説くところと同じことになってしまうであろう。彼らによれば、神は特にアリーのために特別な章句を下され、また神のみ使いも彼のために特別な伝承を述べ、アリーのイマーム職を正当化しているということである。そして教友たちは、アリーにたいする妬みからこれを隠したと主張するのである。ただしスンニー派の者にとってはこれは真っ赤な嘘であり、教友たちは誰一人としてこれを認めることが許されてはいない。ところでこれに関する一般の人々の見解はいかなるものであろうか。もしもこのようなことが実際にあったとするならば、当然それは人々の間に知れわたった筈である。そしてラワーフィド派の主張は、虚偽と詭弁の上になりたっているのである。ムハンマドは以

下の引用部分でこの点に言及している。「教友たちはすべて、宗教にかぎり情報の伝達をおろそかにすることはなかった。そして後代の者たちも、この点に関して彼らを範としなければならない。」

ついで義務には二種類がある。つまり絶対的義務（ファルド・アイン）と相対的義務（ファルド・キファーヤ）である。絶対的義務とは、基本的な宗教的諸行為に関して各個人にその遂行の義務が課されているものである。他方相対的義務とは、一部の者がそれを行なえば、他の者がそれを行なう必要がないような義務である。ただし人々がみなそれをかえりみない場合、彼らは共同で罪を犯したことになる。その一例は聖なる努力（ジハード）である。ジハードの本来の意味は神の言葉を宣揚し、宗教の地位を高めることにある。そしてこの趣旨が一部のムスリムによって達成される場合、これは他の者の義務とはならない。ただし全員がこのような努力を行なわず、結果として不信者が辺境を占領するような事態が発生するならば、ムスリムはそれによって共同で罪を犯したことになる。死者の遺体を浄め、特別の礼拝を行なって埋葬することも相対的義務であり、一部の者がこれを行なえば、他の者は義務を免れる。だが皆がこれを行なわず、死者が出たことを知っていたにもかかわらず遺体が紛失するような事態が生ずれば、人々は共同で罪を犯したことになる。他人に知識を伝達することもこのような相対的義務の一つであり、ある者がそれを行なえば、他の者はその義務から免れる。その義務の目的はシャリーアに生命を与えることであり、一部の者が伝達することによって人々の間に知が保持されることである。もしも人々がこれを等閑りにし、そのために失われるものがあるとするれば、彼らは共同で罪を犯したことになる。

また預言者が望ましいものとしたさまざまな美徳に関しては、それを人々に伝えるのが義務であるという説もある。任意の宗教的諸行為、あるいは預言者が誰かが行なうべきとした事柄の実践は、それ自体義務ではなく、それを行なわなかった者に罪はない。ただしそれを人々に伝達するこ

とは義務なのである。したがって同時代の者がみなでその伝達を蔑ろにしたならば、彼らは義務を怠り、共同で罪を犯したことになる。なぜならば伝達の放棄そのものには消滅と直結してはいないが、実際にはそれによってシャリーアの一部が消滅してしまうからである。類似の例として任意の礼拝を行なわない者があげられる。彼はこれを行なわないとしても、それで罪を犯したことにはならない。ただし浄めを行なわずに任意の礼拝を行なったとすれば、非難に値する罪を犯したことになる。なぜならば任意の礼拝を行なわないことはそれに該当しないが、浄めなしに礼拝を行なうことは法的規定の改変を伴うからである。ところで任意の礼拝の目的は以下の二つの事柄のうちのいずれかである。その一つは悪友の誘惑の声に耳を貸さないためである。悪友は（任意の礼拝をささげる者を見て）考えるであろう。「特に指定されていない（任意の）行ないをきちんと果たすこの男が、義務とされることを怠る訳がない。」これによって誘惑の試みが断たれるのである。これは義務を欠いた場合の話と関連している。伝承は伝えている。「ある男が義務を欠いた場合については、神が天使たちに命じられている。『下僕が義務を欠いたさいには、彼らの任意の行為を強制的に行なわせるよう。』」もしも任意の行ないにこのような意味が含まれている場合には、その説明を放棄し、その意味が完全に忘れ去られるようなことがあってはなるまい。以上で任意の行ないに関してはそれを実践することは義務的でないにしても、それを他人に伝達する義務がある点が明らかにされた。

ところで法学者は耳にしたことをすべて語る必要はないが、その地を離れようとする者に対して、帰る先の町で知られていないような情報を提供することは別であると考えている。つまり説明は本来義務であるが、それを行なう時間はいつでもよいという訳である。ムアーズの故事について言及したおりに述べたように、それは余命いくばくもないことを知った時でもよいのである。彼の許を訪れた人々は、自分たちの町で当時知られていないが、人々に役立ち、彼が他界したのちでも傾聴に値するような情報を

求めていたのである。その場を離れる決心をしない間は、教育に携わる者にはそのために十分な時間がある。しかしそこを出立することになれば、すでに時間は少なく、説明を遅らせている余裕はあまりない。これはちょうど定刻の時間がやってきたさいに、礼拝が義務となるのと同じである。ただしそれでも時間はまだ充分にあるが、定め時間の終わりに近づくと、もはや遅らせる余裕がなくなってくる。事情は町で無名人々の場合と同じであろう。著名な人々についてはこのような必要はない。旅立つ者は(帰りついた)自分の町の(著名な)学者たちからそのような貴重な情報を手にすることが可能なのである。その町の人々は、そこに帰ってくる旅行者の手をわずらわさなくとも、自分たちの学者からその種の情報を入手する。この点で信者たちは1人の人間のようなといえよう。預言者もいっている。「信者たちは1人の人間のようなもの。」つまり肉体の一部が痛めばその全体が痛みを分かちあうのである。したがってある情報が(旅行者が帰っていく)自分の町で有名であれば、(訪問先の町の)先生が彼に説明を怠っても情報が消滅することはない。ただしそれが知られていない場合には、説明を怠れば結局それが人々の間から消滅してしまうことになるのである。したがって町の人々に説明を怠り情報を無にするようなことは認められない。同様に自分の町では知られていない情報を求めて他所から訪れて来る者に、それを提供しないような態度は許されないのである。

第7節 衣食住の諸問題

神が人間を創造したさいに、四つのものを欠いては肉体が維持できないようにされた。それは食糧、飲料、衣料、住居である。

食糧についてはクルアーンはこう述べている。「われは預言者たちに(食糧をとらぬような)肉体を授けなかった。」(第21章8節)「われがあなたがたに授けた善いものを食べよ。」(第20章81節)

飲料については以下の章句がある。「われは水から一切の生き物を創っ

た。」(第21章30節)「(神が授けられたものから) 食べ、かつ飲め。」(第2章60節)

また衣料については次のような章句がある。「アードムの子孫よ、われは恥部を蔽い、飾るためにあなた方に衣装を授けた。」(第7章26節)「アードムの子孫よ、どのマスジドにおいても清潔な衣装を身にまとえ。」(第7章31節)

住居に関しては、人間の肉体は熱さ、寒さにたいして順応性がなく、それらが過度な場合抵抗力がないように創られている。「人間は(生まれつき)弱く創られている、」(第4章28節)とあるように。したがって生きのびて神から授かった委託の責任を遂行するためには、熱さ、寒さの害をしのがなければならない。そのためには住居が必要であり、この意味でそれは食糧、飲料と同じ重要性をもっている。

人々は偉大な英知のこめられたさまざまな事柄のただ中に生きよう定められている。つまりひとは誰しも一生のうちに必要な事柄のすべてを習得する事はできないのである。たとえそれに努めても、完全に習得する以前に寿命が尽きてしまうであろう。だが学びとらなかったものは、ひとりでに獲得されることはない。そして生活の安定は、しばしばそれと関わっているのである。そこで神はあらゆる人間に、その種の事柄を容易に学ぶようにした。その結果ひとはある種の必要な事柄を仕事を通じて学び、他の事柄を学問を通じて習得することができるのである。神のみ使いはこの点について述べている。「信者たちは建造物のようにたがいに結びあっている。」それをさらに説明するものとして、次のような章句がある。「われはある者を他の者の上に地位を上げた。」(第43章32節)これは以下のような事柄を意味する。貧者は金持の財産を必要とする。また金持は貧者の労働を必要とする。ところで現在論じている問題と関連しても同様のことがいわれうる。農民は、衣料を手にするために機織りを必要とする。また機織りも、食糧だけでなく、衣裳を作る材料となる綿を確保するために農民

を必要とする。このようにそれぞれが神に近づき、従順であるような生活を送るために、仕事を通じて他と助けあっているのである。そのような望ましい生活は、これがあって初めて可能なのである。これに関しては次のような章句がある。「正義と篤信のために助け合うように。」(第5章2節) また預言者の伝承は述べている。「ムスリムが仲間のムスリムを助けるかぎり、神は彼を助け給う。」ただしこの種の行為を行なうにあたっては、条件をつけても、つけなくとも差異はない。その目的が上述のようなものであれば、彼の行為は神への従順のためのものとみなされる。伝承は述べている。「あらゆる行為には意志がつきもので、ひとはみな望みのものをもつ。」したがって行為が行為を意志するさいには、すでに従順さが成熟されているのである。また自分の兄弟にそれをさせる場合、彼がそう意志したという理由でその行為は彼自身のものとも評価されるのである。それはちょうど結婚した二人が、子供をつくろうと望み、神の下僕、ウンマの成員の数を増やすさいの行為と同じ地位にある。夫婦はよしんばその行為が本来快樂の追求のためのものであったにしても、それにたいする報奨をうけ、その意志によって同じ行為が神への近づきの努力と評価されることになる。後者が第一義としてとられ、快樂の追求は二義的になるが、現在検討中の問題についてもことは同様なのである。

もしも飲食を断てば、その行為には害があるため、結局は神に反抗することになるという説がある。人間は通常飲食なしには生き永らえることができないため、それを断つ者は自殺を試みる者と同じことになる。しかしクルアーンは「自分自身を殺してはならない、」(第4章29節)と戒めているのである。それは自分自身を破滅にさらすことを意味するが、神はこういっているのである。「自分の手で自分を破滅に陥れてはならない。」(第2章195節) だが自分の腹をみたすほど口にしたならば、「それ以上は神への従順さを強める程度に食べるよう勧められている。もしも十分に食事をとらぬ場合には、体力が消耗し、従順さに欠ける結果となりかねない。伝

承にはこうある。「強健な信者は、ひよわな信者に勝る。いずれの場合も良いことに変わりはないが。」従順さを強化するものを稼ぎ出すことは、それ自体従順であり、それは奨励される行為であって、従順そのものと組み合わせられて従順さを形づくる一部となる。これについてはアブー・ザッルの指摘がある。最良の行為とはなんであろうかと尋ねられたさいに、彼は「礼拝とパンを食べることだ、」と答えているのである。またマスルークやその他の者は次のようにいっている。「必要があったにもかかわらずあえて口にせず死んだ者は、地獄落ちである。」これは死肉を口にすることと関係しているが、必要のさいに禁じられたものでも見出されるならば、そうでない場合に死肉が法的に禁じられ、合法的な食物とされないにしても、それを口にすることが許されるのである。

恥部を隠すことは義務であり、クルアーンも「どのマスジドにおいても清潔な衣装を身にまとえ、」(第7章31節)と述べている。この意味は、礼拝にあたっては恥部を隠せということである。要するにここでとりわけ言及されているのはマスジドである。ところで人間の数からすれば市場にいる者の方がマスジドにいる者より多いのだから、とりわけマスジドに指摘を限ることの要点は、恥部を隠すことの目的が礼拝に関連するとしか考えられない。それゆえこれは礼拝の条件となり、したがってそれが義務となる。恥部を隠すことが人々一般に適用されるとするならば、命令は道徳的義務をのべていることになる。したがって自分の家で独りいる場合でも、それが望ましいことになる。これについては預言者の伝承がある。「預言者は恥部をあらわにすることについて、独りでいる時にはそれも構わないか」という質問をうけた。そのさいにこう答えている。『それは恥ずかしいことだと神が明言しているのは当然である。』」

また男性が容器をもって女性のために水を運んでやる必要があるかどうかという問題がある。女性は礼拝のための浄めや、飲料として水を必要としている。浄めのためには(水を使わない)タヤンムムという別の方法が

あるとしても、飲料の水は欠かす訳にはいかない。ただし彼女たちが水を求めて川や泉、水たまりに遠出をするのは相応しいことではない。彼女たちは家で時を過ごす方がよいとされ、クルアーンも「彼女たちは家庭にいた方がよい、」(第33章31節)と述べているのである。したがって男性は彼女らのために水を運ぶ必要がある。法的規定は男性が女性のためにきちんと支出を行なう必要があると定めており、水も支出と同様とみなされているのである。ただし掌で水を運ぶ訳にはいかず、そのさいには器が必要となる。ところでそれを欠いては必要とされる行為の遂行が不可能であるようなものは、それ自体が正当な理由で必要とされるのである。

上記のような事柄を行なう者は、それをきちんと行ない了せるよう命ぜられている。クルアーンは述べている。「きちんと紡いだものの撚りをもどしてはならない。」(第16章92節) ここで神は、従順を思いたったもののそれをきちんと実行しない者について言及しているのだが、それはいったん紡ぎはじめてその撚りをもどしてしまう女性にたとえられているのである。その場合、彼女は織物も棉ももたないのと同様の結果になる。飲食を断ち、住居も求めず死んだ者もこれと同じで、彼らは当然地獄落ちである。なぜなら彼らは意図的に生命を絶っているのであり、その行為は鉄の道具で自殺したのと変わりはない。預言者は述べている。「鉄の道具で自殺した者は、地獄においてもそれが身体につきささったままであろう。」ところで上述の言葉に関しては二つの解釈が存在する。

第一は、それが威嚇のために述べられたものであり、真の意味はその表現の中に隠されているとするものである。それは神意として定められた地獄落ちを意味している。クルアーンには、「あなた方の誰一人としてそこを通りこせない、」(第19章71節)とある。正統派の者の解釈では、その意味は地獄の中ということになっている。

第二は、その行為の結果の説明であると解釈される。つまりそのような行為の結果、地獄に入ることになるというのである。ただし神の意志にお

いては、それが善意に傾けば彼を許し給うであろうし、公正さを保つ心が強ければ彼を地獄に落とすことになる。これはクルアーン的一句に関する注解にも似通うところの問題である。「その応報は地獄で、彼は永遠にそこに住まうであろう。」(第4章93節) 神がきちんと応報するさいの結果はこうである。しかし同時に神は宥恕の念をもって宥しを与える寛大さを備えており、信者は誰一人永遠に劫火に焼かれることはない。

第8節 浪費について

ひとは誰も食糧を腐敗させることを許されていない。以下は預言者の伝承である。「長々とした無駄話、よしもない訊ねごとに時を費やしてはならない。また無駄に財産を蕩尽してもいけない。」その結果法的に認められた利得の成果を、腐敗させたり、浪費したり、それを確実な用にあてず、いたずらにそれで誇示したり、必要以上に貯めこむことは適法でないとされる。まず腐敗させることは法に反するが、これについてはクルアーンの指摘がある。「神が与えられたもので(来世の住まいを) 請い求めよ。」(第28章77節)「彼らは背を向けるや地上で(腐敗を拡めるよう) 努力する。」(第2章205節) また浪費も法に反するが、これについては以下のようにある。「(食べても、飲んでも構わない。) ただし度を過ぎしてはならない。」

(第7章31節)「支出するさいには(浪費せぬ者),」(第25章67節) 要するに浪費も吝嗇も不法で、その中間が奨励されることが示されているのである。浪費の中には無駄な蕩尽が含まれるが、これについてはクルアーンに次のようにある。「ただし粗末に蕩尽してはならない。」(第17章26節)

食糧の浪費にはさまざまある。預言者はいつている。「腹一杯に満たすのは健康に悪い。必要があれば三分の一を食べ物で、三分の一を飲みもので、残りの三分の一を息で満たすがよい。」また「生き永らえるのに十分な僅かの食料で充分である、」ともある。要するに節食はなんら非難されるものではなく、食事は自分にとって益があるものでなければならない。飽食には

益どころではなく、むしろ害がある。したがってそれは食糧を屑かごに投げ棄てるのと同様であるか、それ以上にいまわしいものといえよう。必要以上の食糧は、他人に権利があるものであり、条件の有無にかかわらずそれが他人の手にわたれば、彼らはそれで飢えを満たすことができるのである。したがって飽食は他人の権利を犯してむさぼり食らうことになり、法に反する。限度をこえて食をとれば、ひとはしばしば健康を害し、結果として自らを傷つけることになる。この問題の論拠としては以下の話があげられる。神のみ使いを囲んで人々が集っていたさいに、ある男が口からものを吐いた。するとみ使いは立腹し、こういった。「吐いたものを片づけなさい。それにしても審判の日にもっともいためつけられるのは、現世でたらふく食べた者であるのを知らないのか。」またイブン・ウマルが病気だと聞いて、預言者はその病気の原因を尋ねた。そして消化不良が原因だと知ると尋ねた。「なんで消化不良になったのか。」そして過食が原因であると知るとこういった。「もしも彼が死んだとしても、私は葬式にも行かないし、彼のために祈ることもしないであろう。」

ある時ひとがウマルにいった。「あなたに薬をもってきましようか。」ウマルはそれがなんの薬かと尋ね、それが消化剤であることを知るといった。「神よ讃えあれ、いったいムスリムが適度以上に食べると思うのかね。」ただし後代の者は例外を認めている。それは正しい目的がある場合には、限度を上まわって食事をとることも差し支えないというものである。例えば必要を満たすだけの食事をとったのちに来客があった場合、客人に気まずい思いをさせぬために共に食事をとることは認められる。また翌日断食をしようと思い立ったさい、翌日の昼間のために体力を養うよう前夜に余分の食事をとるといった場合も同様である。

食物の種類、量をふやすことも浪費に相当する。そして預言者もそれを審判のさいの条件の一つに数えてこういっている。「彼らの食卓に多くの皿が持ち出されると、神の呪いが下される。」またアーイシャにまつわる以下

のような逸話もある。ある時彼女は客によばれたが、そこには次から次へと料理が持ち運ばれた。そこで彼女はこういつている。「まだ最初の料理を食べ終わっていません。それなのになんで次の料理が出てくるのですか。本当は最初の料理で充分でしょう。神のみ使いもいつています。『料理をふやしてもよいが、一品ではどうにも我慢がならない時に限られる。ただし神の命令に従うに相応しい体力をつけるためであれば、合法的な食べ物をなんでもとりそろえてよい。』」ここで一つ故事を引けば、アル=ハッジャージュはアブド=ル=マリク・イブン・マルワーンに手紙を書き、三つの点で苦情を述べた。それは食事がまずく、娯楽がなく、また自分が話下手である点である。そこでアブド=ル=マリクはこう返事を送っている。「まずは料理の数をふやし、それからひんばんに相手の女を代え、説教のさいにはちがう女たちの顔を見ているがよい。」(著書はここでウマイヤ朝の貴顕の士の墮落ぶりを指摘している。)

食事に必要なものの以外にさまざまな料理を食卓にならべることも、浪費に数えられる。なぜならば必要以上の食糧は他人の権利に属するものであることはすでに述べた。ただしそれに正当な目的があり、例えば次から次へと多くの客を呼んで、結局客人がそれを食べ終えるような場合には、すべてが有益に活用されているため、問題とはならない。

パンの中だけを食べて端を残したり、よく焼けた部分だけを食べるといった無智な者がよくする食べ方も、浪費に数えられる。彼らはその方が美味であると思いこんでいるのである。ただしこれも他人が食べ残しの部分を食べない場合であるが、もしも他の者がとりわけそれを好んで食べるとするならば問題はない。

食事が終わった後パンで(手や口を)拭き、それをきちんと食べ終えないような態度も浪費に属する。他人はそれを汚いと思い、口にすることはないのである。ただし拭いたのちに、そのパンをきちんと食べ終えるならば話は別である。

手から落したものを放置することも浪費の一つである。むしろそれから初めに口にすべきであるが、そうしないとすればそれは食べ物を粗末にする態度といわざるをえない。食事をとることには、それを大切にすることが含まれるが、パンを大切に扱うべき点についてはすでに述べたはずである。これについては預言者もいっている。「パンを大切にせよ。それは天と地の恵みに属するもの。」パンが食事に供された場合、他の食べ物が給仕されるまで待たず、それが出される以前に食べ始めるのも、パンを大切にすること一つに数えられている。人間は授けられた恩恵に感謝し、それを無視しないように奨められているからである。落ちた食べ物を放置することは恩恵の無視につながるが、ほかの料理が給仕される前にパンを口にすることは、恩恵にたいする感謝を意味するのである。空腹であるにもかかわらず、他の料理が供されるまで待つことは一種の遅延であり、このような態度は避けなければならない。これについては以下のような逸話がある。アブー・ハニーファがある時気のふれたバフルールと出会ったが、彼は道端に座ってものを食べていた。そこでアブー・ハニーファは語りかけた。「道路でものを食べてもよいと思っているのかね。」するとバフルールは答えた。「アブー・ハニーファよ、君が私にそんなことをいうのかね。パンが手許にあって、自分の心がそれをぜひとも欲しがっているのに。預言者もいわれている。『富(の利用)を遅らせるのは不正である。』家に帰るまで待つこともないではないか。」

虚飾も不正とみなされるが、それは次の伝承にもとづいている。預言者はミクダードに、彼の衣服について忠告している。「派手にするのは避けたほうがよい。地味にしていって悪いことはないのだから。」

奢侈に流れ、いたずらに多くを求めることも法に反するが、これは次のようなクルアーンの言葉にもとづいている。「この世の生活は遊び、快樂であることを弁えること。」(第57章20節) これはそれに対する非難の意味で述べられているのである。クルアーンはさらに、「より多くを得るために

施してはならない。」(第74章6節)「富と多くの子女を持っていたにしても(性悪者、卑しい者に屈服してはならない)。」(第68章14節)「(財産や子女の)多いことを競ってうつつをぬかす。」(第102章1節) 以上の章句から、奢侈や多くの財を求めることが不法であることが容易に認められるのである。

衣料の問題は、すでに述べたあらゆる点で食糧の問題と類似している。まず衣料についても、上記の点是否認されているのである。その論拠は、預言者が伝承で他人の眼をひくような二つの事柄を非難していることにある。つまりそれは他人に指をさされるほど華美で、豪華な着物を身につけたり、また同じほどボロをまとうことをさしている。一方は浪費であり、他方は吝嗇だというのである。推奨されるのはその中間であり、いつも洗濯された清潔な着物を身につけていることが望ましく、新しく、美しいものに金を費やすことはない。預言者の伝承には、「不潔さも信仰心のあらわれ」とある。ただし祭日や人の集まり、その他特別な場合に手もちで一番良い着物を身に着けることには問題はない。預言者に関する伝承もこう伝えているのである。彼は(ビザンチンのエジプト領主)アル=マク=カスから贈られた立派な毛皮のマントをもっていたが、それを祭日や集会の日、あるいは訪れる使者たちと会見するさいに着用していた。また他の伝承によれば、彼は絹で縁を飾った外衣をもっていたが、それを祭日や集会の日によく着用していた。特別の機会にこのような着物を着用することは、恩恵にたいする感謝のあらわれである。預言者はいっている。「神が下僕に恩恵を授けられるさいには、彼にその印を認めることを望まれる。」ただし年中これに気配りしつづけることは虚飾に数えられ、貧しい者の怒りを買うであろう。したがってこのような態度は避けるべきなのである。同様に冬の間寒さをしのぐために外衣が一枚で足りる場合には、二枚も三枚も重ね着をしてはならない。そのような態度は他人の気持ち害しかねないが、他人の感情を損ねる原因を作り出すことは、強く戒められている。衣服を

着用することの目的は、そのようなことをしなくとも達成されるのだから、むしろ質素な衣服をまとった方がよいのである。ウマルに関する逸話によれば、彼はたえず質素な着物しか身に着けなかったといわれている。ところで冬に厚い生地を着て、夏に薄手の衣装を身につけるといったことは、問題ではない。夏に着る薄手の服では防ぎきれない寒気を、厚い生地の服がさえぎるからである。冬にこのような服を着用し、夏に厚手の服では相応しくない汗とり用の薄手の服を身につけることは、むしろ必要になったことなのである。ただし一着しか着物が無い場合、夏冬それを着ても一向にかまわない。「いってやるがよい、アッラーからの良い授かり物を誰が禁ずるのか、」(第7章32節)とクルアーンの一節は述べている。

食糧、衣料について個人にたいし奨められる以上のような事柄は、同時に家族のための食糧、衣料にも該当する。なぜならば彼らにたいしてきちんと支出することは、神の命じている正しい行為なのだから。そのさいにも奢侈にわたらず、吝嗇であってはならないとされている。一般には、家族の者の欲望をなにもかも満たしたり、なにもかも拒否するのではなく、その中間に位するほどのことのために支出すべきであるといわれている。中庸こそ最良の道なのである。

同様にいつも食事を腹一杯とすることは避けねばならない。預言者はこの点を次のように説明している。「一日は空腹で、一日は腹一杯に。」またアーイシャは預言者が他界したさい、こう述べたと伝えられている。「寝床に臥せず仮の敷物でまどろんだ人よ。劫火を恐れて夜も寝なかった人よ。絹の着物も身に着けず、麦のパンを食べることも少なかった人よ。」またアーイシャの言葉としてこう伝えられている。「おそらく一カ月あるいはそれ以上も家に火が点じられることもなく、ただ二つの黒いもの、つまり水と棗椰子の実だけで過ごさねばならぬ時がくるやもしれない。」また預言者の伝承には、「審判の日にもっとも長く飢えにさいなまれるのは、この世で腹一杯口にしてきた者、」ともある。したがって年中腹一杯食べ物をとることは

好ましくないとされるのである。

ひととは長らく食事をとらず、結局のちにそれをとっても役立つような状態に自らを追いこんではならない。つまり飢えをいやしても、それが健康を害したり、消化不良で胃を悪くするようでは、食事になんの益もないのである。必要なさいにきちんと食事をとることは、なにものにも代え難い人間の権利なのである。預言者はある教友にいつている。「あなた自身はあなたの乗り物である。それゆえ大切に取り扱い、飢えさせてはならない。」また以下のような伝承もある。「あなたはあなたにたいして権利がある。同様にあなたの家族はあなたにたいして権利があり、神もあなたにたいして権利をもつ。それゆえすべての権利の所有者にそれに相応しい物を与えなさい。」また預言者はアル=ミクダード・イブン・マアディー・カルブにいつている。「虚飾にわたらぬほどに食べ、飲み、身にまとえ。」義務的行為の推奨はまさに正当なものであり、食事を過度に断つことは自分自身を死にさらす行為であって、法に反する。それは宗教的義務の不履行を招く行為とみなされるが、自分が死んでしまつては義務の遂行が不可能であるとすれば当然である。果されるべき義務の不履行は法に反し、そのような原因となることを犯すことも法に反するものである。

宗教的義務の遂行に支障をきたさぬほど食を断ち、その後食事をとって健康を維持しうるとすれば、なんの問題もない。断食のさいにはその義務を果すまで食事はとらないし、おいしく食事をとるためにそれを遅らせることもある。空腹時に口にするものは、もっとも美味に感じられるものだが、きちんとした目的があればこの種の行為も合法といえるのである。これは腹一杯以上食事をとることに該当する。それはそれ自体では不法であるが、正当な目的があれば別である。だが食事をとっても無駄であるほど食を断つことには正当な目的はない。むしろそれは自分を死に追いやる危険性をもっているが、自分自身を大切に扱うことは他人を大切に扱う以上に重要なことなのである。力を尽くして他人の生命の維持に貢献するこ

とが望ましく、彼らを死に導くようなことが不法であるとすれば、このことは自分自身により一層通用するのである。

ある種の禁欲主義は主張する。食を断ち死ぬようなことがあっても、それは罪ではない。なぜならば人間の心は悪を行ないがちであり、神自身がそれを人間の敵としているのだから。預言者はこういつている。「人間の最悪の敵は身中にある。」つまりそれは自分の心の中にある。ひとは自分の敵を力づけるべきではない。とすればその成熟の機を絶つことになんの罪があるであろうか。預言者はいつている。「最善の努力は心の努力である。」ところで自分を飢えさせることは、心の努力に他ならず、それを罪とすることはありえないのである。

これにたいするわれわれの反論は以下のごとくである。心の努力とは、宗教的義務を遂行するための努力である。しかし上述のように食を絶つことは、義務の不履行につながるものであり、その履行の助けとなるものではない。すでに述べたように人間は神からの委託物を運ぶように定められており、神は人間がその義務を果しうよう無垢のものとして創造しているのである。その義務を正しく果すためには、必要のさいに食事をとることが不可欠である。そしてそれなしに責務を遂行しえないようなものは、またそれ自体が責務そのものといえるのである。

ただし快楽や過剰な欲望に溺れるおそれのある若者が食を控え、快楽の抑制に努めることには問題がない。それは宗教的義務の不履行とは関係のない節食であり、これについては預言者もいつている。「若者たちよ、君たちは結婚しなければならない。しかしそれが不可能ならば、欲情が強いおりには断食をすること。」この場合の食断ちは、罪を犯すことから身を守るという目的をもっているが、これについてはアブー・バクル・アル=ワッラクが述べている。「食断ちには飽食があり、飽食には食断ちがある。」そしてこれを次のように説明している。「飢えて食物を必要とするおりには、あらゆる罪で腹一杯であり、食物で腹一杯の時にはあらゆる罪に飢え、そ

れを熱望する。罪を犯すことを避けるために努力することは義務であるが、そのためにこのような食断ちをすることは許されている。」

第9節 困窮者と物乞い

困窮者が外出し、食糧を求めることもできないでいる場合には、それを与えるのが人間の義務である。この問題は多岐にわたるが、その一例としては次のようなことがあげられる。外出することもできないような困窮者がいる場合、その状態を知った者にそれが可能なさいには、このような人間が十分に体力をつけ、外出ばかりでなく宗教的義務を遂行しうよう、食糧を提供する義務がある。預言者は述べている。「隣人を飢えさせて、自分だけが腹一杯の人間は信者ではない。」ところで他人がそのような状態にあることを知りながら彼を死なせてしまった場合、人々はみなで罪を犯したことになる。預言者の伝承には次のようにある。「豊かな人々の間である男が放置されたまま死に至ることがあれば、彼らはそれゆえに神の庇護も、預言者の庇護も期待しえないであろう。」また困窮者の状態について知り及んだ者が、自分で施し物をする余裕はないが、救助を求めて人々に知らせることが可能である場合には、そうするのが義務である。災厄に見舞われた者が近くにいたさいに、可能な限り救助の手をさしのべるのは信者の義務なのだから。神への従順は、能力に応じてなされるべきものである。もしも人々がこれを怠り死に至らしめたならば、彼らは共同で罪を犯したことになる。ただし一部の者がこの義務を果せば、他の者は免除される。

これと似た例は捕虜の身受けである。ある信者が敵に捕えられ、生命の危険がある場合、それを知ったムスリムは自分の財力の及ぶかぎり以身代金を支払う義務がある。もしも自分でそうすることが不可能であれば、少なくともそれを他の者に報知しなければならない。ただし一部の者がこれを行なったさいには、すでに目的が達成されているため、他の者はその義

務を免除される。ところで上述の二つの例の間にはなんの相違もない。なぜならば襲いかかる飢えは、本来死の危険を伴う敵のようなものであり、多神教徒の敵に等しいものである。

困窮者が外出は可能であるが、利得をあげることが不可能な場合、彼とはにかく外に出て他人に助けを求めなければならない。そして彼のそのような状態を知った者は、提供すべきものをもっている場合それを彼に与える必要がある。救助を求められた者は、当然義務的に援助されるに相応しい者に会わしたことになるのである。したがって困窮者に支出することにより、義務を果しおえるよう心掛けるべきなのである。ひとは他人より自分にたいして一層忠実でなければならない。もしも義務的な行為を果しおえたならば、彼は自分自分のためにさらに善行を積むよう心掛けることが肝要なのである。クルアーンは次のようにいっている。「善行を心掛けること。まことに神は善行を積む者を嘉し給う。」(第2章195節)「神により貸付を行なう者は、(2倍の返済をうけ、他に気前のよい報奨を受けるであろう。)」(第57章11節) また預言者は、もっとも良い行為はなにかと尋ねられたさいにこう答えている。「平和をひろめ、食を供与し、人が寝静まる夜にも祈りを捧げること。」

困窮者は自分で稼ごうの間はそうすべきであり、物乞いをする事は許されない。預言者の伝承にはこうある。「物乞いをせずに済むにもかかわらず他人にものをねだる者は、審判の日に憔悴し、顔に切り傷、掻き傷をつけて裁かれるであろう。」また以下のような伝承もある。預言者が喜捨を与えていたさいに、二人の男がやってきて分け前を求めた。そこで彼は二人を眺め、彼らが充分仕事ができると判断していっている。「望みならばやらない訳でもないが、お前たちにはこれを受け取る権利はない。」これは兩名には物乞いをする権利がないという意味なのである。他にもこのような伝承がある。「財力のある者、五体健全できちんとした人間には、喜捨を受け取ることは許されない。」要するに自分で稼ぐ充分力のある者には物乞

いは認められないということなのである。また「物乞いは人間の最後の利得である、」という伝承もある。ただしもしもあえて物乞いをするならば、与えられない訳ではない。喜捨を受け取ることは認められるが、それは「望みならやらない訳でもないが」という上述の表現に明らかなであろう。もしも認められないならば、このようなことが言われなかったはずなのである。クルアーンには、「喜捨は貧しい者のためのもの、」（第9章60節）とある。ただし利得が可能であっても貧しい者がいる。もしも貧者が利得を手にしえないが、外出する力がある場合、彼は家の門を巡り歩き、物乞いをすべきなのである。そうすることは彼の義務であり、もしもそれをせずに命を絶つようであれば、罪を犯したことになるというのが法学者たちの見解である。

ある禁欲主義者たちは主張している。物乞いは一種の許可として認められる。だがそれを放棄して生命を絶ったとしても、罪にはならない。このような主張はアル＝ハサン・イブン・ジヤードの説とされるものに類似している。彼はいつている。「ある男が、水を持参した友人と一緒に旅に出たとする。だが彼には友人に水をねだることを控えさせる誇りなどなにもなかった。しかし彼が友人に水をねだらずに、（砂で行なう）タヤンムムの浄めを行なって礼拝したとしても、その礼拝は有効とみなされたのである。」（この場合禁欲主義者たちは、タヤンムムの浄めを行なって、友人に水をねだり通常の水で行なう浄めをすべきではないと主張している。）われわれは彼らの主張を認める訳ではないが、彼らによれば物乞いは身を卑しめることである。そして信者たる者は自らを卑しきから守らなければならない。それを例証するものとしてアリーの詩が引かれている。

山の頂きから石を運ぶ労苦は
徒らに他人の恵みを求めるよりはまし
稼ぎは恥とひとは口にすが
それは物乞いの卑しきにこそある

物乞いによってひとが卑しめられることは確実であるが、それから得られる利益は不確実である。ねだったものは時に与えられるが、手に入らないこともしばしばである。したがって物乞いは必ずそうすべきことでなく、ただ彼に許可されているだけだといえる。不確実なことは確実なこととは対比されえない性質のものなのだから。

このような意見にたいするわれわれの反論は以下のごとくである。物乞いによってひとは自分の生命の維持を可能にし、それによって十分な活力を身につけ、従順な生活を送る。したがって物乞いは、利得が可能な者にとって利得が義務であるのと同様に、義務的な行為に他ならない。このような場合には物乞いを卑しさに通ずるものと解することはできないのである。クルアーンはこう述べてはいないであろうか。モーゼとその師は困窮したさいに物乞いをした。「二人は村人に食を求めた。」(第18章77節) ここでは'*istiṭ'ām*という表現が用いられているが、これは食糧を求めるという意味である。この場合求められているのは二人の労働の対価としての食糧ではない。「もしも望むならば、それにたいする報酬を手にするであろう。」(第18章77節)(この逸話でモーゼとその師は、人々が歓待を拒んだのちに村の崩れかけた壁を直した。そのあとでモーゼが口にした言葉がこれであるが、この文脈から最初に彼らはたんなる物乞いをしていたことが解る。)要するに彼らの望んだものは贈物、喜捨としての寛大な振舞いによる授かり物だったのである。ただし預言者ムハンマドの場合を除いて、預言者たちに喜捨が認められていたか否かについては異論がある。

この問題に関するわれわれの説明は以下のごとくである。神のみ使いは必要のさいに教友の一人にこう頼んだことがある。「君のところになにかわれわれの食べるものはあるかね。」また人々にこうもいっている。「君たちは水筒に水をもっているかね。ないとすれば水のある谷に急がなければならない。」またある男に(肉が少ない)羊のひじ肉を求めて、「私にひじ肉をとってほしい、」といっている。これについては長い伝承がある。ところ

でもしも必要のさいに物を乞うことが卑しいものであれば、預言者たちがそのようなことをするはずはなかったであろう。彼らは卑しきの原因となるような態度からはもっとも遠くにいた人々なのだから。自分の生命を救うに足りるだけのものは、当然他人の財産から要求しうる権利のあるものであり、したがって当然要求する権利のあるものを求めることには、なんの卑しさもない。ひとはそのような場合、物乞いをする権利があるのである。

ただ自分で利得にはげむことが可能である場合には、ひとは物乞いをする権利をもってはいない。彼の権利は利得のうちにこそあり、したがって彼は働き、他人に物乞いをしてはならない。しかし彼は、ムーサーがそうしたように、主に頼むことが可能である。「主よ、あなたが私に授けられる良いものをお与え下さい。」(第20章24節) これに関しては他にも言及がある。「神の恵みを乞い願え。」(第4章32節) また伝承にはこうある。「必要なことは、なべに入れる塩、サンダル紐までも神に乞い願え。」

第10節 授与と受け取り

授与する者は、受け取る者が受け取る行為において義務を果しているとしても、後者に優っている。この問題は三つの問題を含んでいる。その第一は以下のごとくである。

授与する者がそれによって義務を果し、受け取る者は利得も可能であるが必要に迫られたとするならば、異論の余地なく前者が後者に優っている。なぜなら授与者は与える行為において義務を果し、受取人は贈物を受け取ることも、自ら利得にいそむことも可能な状態で恵贈を受けているからである。これは他の宗教的義務全般に通用することであるが、義務を遂行する方が、任意の行為を行なうより高い地位にあるのである。クルアーンに明記されている本来的な義務の遵守は、任意の義務の遂行より多くの酬いが期待されるのである。この問題に関して論証をあげるならば、義務を

遂行する者は自分自身のために行為しているのにたいして、任意の行為を行なう者は他人のために行為しているということがあげられよう。ところで伝承にも「自分自身の事柄から始めよ」とあるように、自分自身のための行為がもっとも優れたものなのである。この意味するところは、自分自身のために行為する者は、この行為によってわが身の安全を確保することである。他方受け取る者はその行為そのものによって自らを利することはできない。受け取ったのちに、食糧を口にすることによって始めて利益が生ずるのだが、それまで彼が生きのびるか否かは定かではない。したがって喜捨の授受において、恩恵の点に関するかぎり、金持が貧者に優るということを認める訳にはいかない。彼は貧者が受け取るもの以上の酬いを受け取っていることになるのだから。つまり喜捨の授与は、金持にたいしてさしあたり必要ではないが、必要のさいにはそれを獲得しうのような酬いを提供するのである。ところで金持は現に目的を達成するためには、是非とも喜捨を与えることを必要としているのである。もしも貧者が一致して喜捨の受け取りをやめたとしても、彼らはそれによって罪を課せられるどころではなく、むしろ賞賛されることであろう。その点で金持が一致して義務の遂行をやめる場合とは異なるのである。以上によってわれわれは、貧者がむしろ金持に恩恵を与えていることを知るのである。

第二は授与する者も受け取る者もともに与える者である場合である。つまり前者が与える者で、後者が与えられたものによって利得に携わりうるとすれば、そのさいにも前者が優れていることになる。なぜならば授与者は与えた分だけ富を減らし、貧乏に近づくからである。受け取る者は受け取っただけ富に近づくことになる。すでに明らかにしたが、貧者の地位は富者のそれに優るのであり、自らの行為において貧困に近づく者は一段と高い位置にある。また宗教的諸儀礼は試練を基礎に定められているのである。クルアーンは述べている。「それはなんじらの誰の行ないが優れているかを試みるため。」(第67章2節) そして試練の意義は受け取ることより

授与することに一層明らかである。試練は（通常の）心の動きに順応しない行為のうちにこそあるが、万人の心のうちでは授与するより受け取る方に強い衝動が存在しているのである。それについては伝承も述べている。

「1ディルハムを喜捨するにあたりムスリムは、70人の悪魔の欲望を絶たねばならない。」授与が試練により相応しいものであるとするならば、以下の伝承にてらしてそれがより優れているというであろう。優れた行為に関して質問をうけた預言者は、こう答えている。「それはもっとも労苦を伴うものである。」つまり肉体にとってもっとも努力を要するものであるということである。また優れた喜捨について尋ねられたさいに、預言者は答えている。「自ら富をあえて減少させる者の努力である。」

受け取る者はそれによって快樂を享受しうるようなものを手にする。しかし授与する者は自分の富から快樂を享受しうるものを取り除くのである。人間から快樂の享受を禁ずることが、一段と高位に立つことはいうまでもない。

第三は授与する者が任意の立場にあり、受け取る者が本来的であるような場合、つまり利得にいそしむことが不可能な状態で、飢えをしのぐ必要がある場合である。法学者たちは、この場合でも授与する者が優れている。ただしアフマド・イブン・ハンバルやイスハーク・イブン・ラーフワイヒのような伝承学者たちは、この場合には受け取る者が優れていると主張している。つまり受け取る者はその行為によって義務を果たしているが、授与する者は任意の義務を果たしているのみだから、というのがその論拠である。すでに本来的な義務の遂行は任意の義務の遂行に優ると指摘した。ところでこの場合、受け取る者はその行為を行なわなかった場合、罪を犯すことになる。だが授与する者はそれを行なわないとしても罪にはならない。彼以外の人間が義務として授与を行なっている場合がありうるからである。そして報酬は罪の対項に位置するものなのである。神は預言者の妻たちに、一般の女性にたいするそれに倍する警告を与えている。「なんじら

のうち明白な醜行を犯した者は（それにたいして二倍の罰を与えられよう。）」（第33章30節） ついで彼女らにその順従さ故に一般の女性に倍する報奨を与えていることは、クルアーンに明らかである。「（なんじらのうち善行にはげむ者には）それにたいする報奨を二倍にしよう。」（第33章31節） そして罪について、授与する者にそれと関わりがなく、受け取る者にのみ該当するとするならば、同様の理由で報奨については、受け取る者の方が授与する者より多いことになる。ただしこの問題は挨拶に応ずることを例として考えることも可能である。挨拶はスンナとして行なわれるに相応しい行為であるが、それに応えるのは義務である。ただしこの場合挨拶を先に行なうことは、それに応ずるより優れているとみなされるのは伝承の述べている通りである。「挨拶に関しては、これを先に行なった者には20の善行が加えられ、それに応えた者には10の善行と数えられる。」また受け取る者は自分の生命を維持することに努め、授与する者は自らを強化する、あるいは自らの（死後の）財を増やすことに励んでいるといった見解もありうるであろう。その場合には生命の維持は、財を増やすことの上位に立つのである。ただしこの点についてのわれわれの見解は、預言者の「高い手は低い手に優る、」という言葉に依拠するものである。そのさい任意の義務の遂行と本来的義務の遵守の差を論ずるまでもない。ところで高い手の意味するところを貧者の手であると解釈する説もあるが、それはこの手が法の手（代理）の役割を果たすためである。つまり喜捨を行なう者は自らの財を自分の所有から切り離し、貧者に授けることによって、それを神に属するものとするのである。これにより彼は神から十分な満足を受けるが、そのさい貧者は金持から受け取ることによって法の代理の役割を果たすという訳である。ただしこれを説明するクルアーンの章句としては、「神は下僕たちの悔悟を認め、」（第9章103節）があげられるであろう。また預言者はいつている。「喜捨は慈悲深き神の手に委ねられ大きく価値を増す。ちょうど人間が仔牛を育てて山のように大きくするように。」以上で高い

手が、具体的には授与する者の手であることは明らかであろう。授与する者はその行為によって汚れから身を浄め、受け取る者は身を汚すのである。これを説明するのが「彼らの財より喜捨を取れ」（第9章103節）という一節である。ここでわれわれは喜捨を行なうことが浄化、純化を行なうという意味であり、それを受け取ることが汚れに身を委ねることであると認めるのである。神のみ使いは、喜捨を「もっとも汚れたもの」とも「洗い浄めるもの」とも呼んでいるのである。預言者はこうもいっている。「ハーシム家の者どもよ、神は君たちのために人々の手を洗うものを忌み嫌われる。」これは喜捨をさしているが、要するに預言者は自ら授与することに専念し、自分のためにそれを受け取ることが禁じているのである。別の伝承では、「ムハンマドとその一族の者には喜捨を受け取ることが許されない、」とある。人々は他の預言者たちの権利について言及している。そしてある者は彼らも同様に喜捨を受け取ることが禁じられているが、親族たちには認められると説いている。ただし神はわれわれの預言者に高い評価を与え、その親族にも喜捨の受け取りを禁じている。これはわれわれの預言者の卓越性を、その親族すらが、この点に関して他の預言者たちと同格であることによって示すものに他ならない。

これにたいしては以下のような異論がある。喜捨は他の預言者たちにも認められており、それはわれわれの預言者の特質でもある。なぜならば喜捨の禁止が地位の向上につながるものだといえないならば、いかにしてそこに徳性、特質が認められるであろうか。もしもそれを受け取ることが授与することに優るとするならば、預言者やその一統にその受け取りを禁ずることに特質、徳性を認める意味がなくなってしまうのだから。これにたいする反論は以下の通りである。法はあらゆる個人に喜捨を行ない、また物乞いをしないように奨めている。預言者はサウバーンに述べている。「他人がお前に与えるか、与えないか定かでないようなものを、ひとに乞うてはならない。」また預言者はハキーム・イブン・ハッザームにいつている。

「よいか、与えてくれるかくれぬか定かでないものを、他人にねだったりするものではないぞ。」彼はこの言葉を耳にしたのち、他人になに一つ物乞いをせず、他人からなに一つ物を貰ったことがなかった。ある時ウマル・イブヌ=ル=ハッターブが、自分たちの手にしたものうちの正当な取り分をハキームに手渡そうとしたが、ハキームは神のみ使いの言葉を耳にした以上、誰からもなに一つ受け取りませんと断わった。そこでウマルは彼の主張の正しさを証言していった。「皆の衆よ、私は君たちに、彼が正しいことの証人となって貰いたい。私は彼に分け前を手渡そうとしたが、彼はそれを受け取ることを拒んだ。」この逸話は授与が受け取りより優れていることを明示する例証であろう。クルアーンは述べている。「彼は控え目であるため、知らない者は不足がないと考える。」(第2章273節) これはつまり物乞いや、喜捨の受け取りを控えるということである。また預言者はいつている。「自ら控え目な態度をとる者にたいしては神は慎ましい運命を保証し、自足を旨とする者には相応の富を与えるが、依存心の扉を一つあける者にたいしては、貧困の70の扉を開くことであろう。」ところで慎ましが他人から受け取ることに關するものであるとするならば、受け取る行為を敢えてすることは、形式的に慎ましさを断念することに他ならず、それゆえ与えるの方が受け取る者より優れ、いかなる点においても上に立つのである。

またそれを食べることが義務とされるものを口にすることによって報奨が期待される。それはむしろ命令に近いものであるため、断食や礼拝を行なうことに匹敵するとされるのである。それゆえ金曜日の礼拝に参加したり、礼拝のための浄めを行なう努力と同列におかれる。その根拠は、預言者の次のような言葉にある。「信者にたいしては、口にする一かけらのものにいたるまですべて報奨が与えられる。」また他の伝承は以下のようにいつている。「信者は妻と交わることに對しても報奨が与えられる。」またこういう話もある。ひとがこのように質問した。「欲望を満たしても報奨が与

えられるのでしょうか。」その場合にはこう答えるべきである。「法的に認められていないことで欲望を満たしたとしたら、罰せられることはないのだろうか。」(問題は欲望を満たすこと自体ではなく、それが合法的な手段で達成されているか否かである。合法的であれば、不法であることが罰されることに反比例して報奨に値することになる。)われわれはこれと同様の仕方で論証を行なうが、ここではもしもそうすることが義務であるような場合にあって食物をとらないとすれば、その行為は罰に相応しいとみなされると指摘しておこう。食事は報奨に相応しいものであり、預言者も次のように述べている。「人間のもつ良き金は、他人のために用いられる金である。」もしも他人のために使うことが報奨に値するならば、自分のために使うさいにはより適切であるといいうるのである。

一説によれば、それは報奨を受けるに相応しいものであるため、特に負の評価が下されず、非難され、罰を受けることはないといわれる。ただし、非難され、負の評価を下される根拠はなににあるのであろうか。この論拠としては二つの伝承があげられるが、その一つはアブー・バクル・アッ=スイッディークの伝承である。「彼は神のみ使いに尋ねた。『私は貴方と一緒にアブ=ル=ハイサム・イブン・アッ=タイハーンの家で食事をとりました。肉とパン、麦と油だったと思いますが、最後の審判の日にわれわれはこの享楽について問われることになるのでしょうか。』すると預言者は、『その日なんじらは自ら耽った享楽について必ず問われるであろう。』(第102章8節)というクルアーンの一節を引いてからいった。『アブー・バクルよ、それは不信者たちについていわれることだ。信者たちについては三つのものについては問われることはない。』そこでアブー・バクルは尋ねた。『み使いよ、それはなんでしょうか。』預言者は答えていった。『隠しどころを掩うもの(衣)、肉体を維持させるもの(食)、暑さ寒さから守るもの(住)である。それ以外の享楽についてはすべてが問われることになる。』

第二の伝承はウマルの伝えているものである。「ある時彼はみ使いと共に

ある男の許に客として招待された。そこで一束の棗椰子が供されたが、そこには熟れた実と未熟の実が混ざっていた。それを見て預言者はいった。

『君たちはこれについて必ず審問されることであろう。』ウマルはその束を取りあげ、埃を払ったが、そのさいに実が土の上に散らばったので、『これについても問われるのでしょうか、』と尋ねた。そこで預言者は答えた。『その通り、あらゆる楽しみは、冷たい水一杯を飲むことすら問われることになる。ただし三つのことを除いての話だが。つまり肉体を維持するための食物、隠しどころを掩う布、暑さ寒さから守る家を除いては、ということである。』

また原書本文の中には次のような指摘がある。上述の事柄については、特に評価の対象とはならないとするのがウマル、ウスマーン、アリー、イブン・アッバースの説であり、彼らの間の合意は論拠として十分なものである。そしてこの程度に甘んじて生涯を終えた者は、審判のさいにとりわけ善悪の秤にかけられなくとも楽園行きが疑いない点について、アブー・フライラの伝承が伝えている。それによれば預言者はいっている。「イスラームの道を正しく歩み、神の与えられたものに満足する者は、審判をまつまでもなく楽園に入ることができる。」またクルアーンの一節「よく耐え忍ぶ者は審判をまつまでもなく大きな報奨を受けるであろう、」(第39章10節)から理解される解釈として、「必要という限度を守って忍耐する者がこれに該当する」という解釈をする者もある。

ついで満腹するまで食物をとることも完全に許されている。これについてはクルアーンに、「言え、誰が神の良き賜物を禁ずるのか、」(第7章32節)等の論拠がある。これによりその程度のことが禁止の対象にならないことは明らかである。禁止の対象でない限り完全に許される訳であり、したがってクレープや果物、糖分の多い菓子等を食することは容認されている。ただしこれら以外のものについては、それを口にせず上述のもので満足しておくことが望ましい。そのようなものを口にすることは贅沢の部類に

入り、強い意志でそれを拒むことは優れた態度とされるのである。これを支持するものとしては、関連した二つの伝承がある。第一はアッ=スィッディークに関する伝承である。「彼のところに蜜の混ざった冷たい一杯の水が届けられたが、それを口に近づけてから押し戻し、それに相応しい喜捨を貧者たちに与えるよう命令していった。『なんじらは（この世において）もろもろの善きものを得て（それを享樂したが）、今日はそれゆえ恥ずべき罰で報いられよう、』（第46章20節）とクルアーンにあるが、私は他人からそういわれる身になりたくはない。』」ここにはまずそれを口にすることが許されているという証拠が見出される。彼はそれを一度口許まで近づけているのだから。だがそれを拒むことがより良いという証拠も存在している。

第二のハディースはウマルのものである。「彼はある時奴隷女を購ひ、彼女に命じて身づくろいさせてから自分のところに呼びよせた。そして彼女の姿を見るや涙を流していった。『この世の中であらゆる快樂に身を委ねるような者ではありたくない。』そして女性と縁のない若い教友を呼び、女を彼に与えてから次の一節を唱えた。『彼ら（教友たち）は自ら窮乏していても、他の者（移住者）に先んじて与える。』（第59章9節） 宗教における良き手本は使者たちの道であるが、彼らはおおむね過度にわたらぬもので満足しており、イスラームの預言者にしても同様なのである。ただし時にはその域を脱することもあるが、その例としては以下のような伝承がある。預言者はある時教友に洩らしたことがある。「ムラッバクのようなまいパンを食べたいものだ。」そこでウスマーンが大きな容器にムラッバクをもってきた。預言者はそれを口にしたとも、口にしなかったともいわれているが、とにかくその分だけ喜捨をするように命じている。

パンを満腹するまで食べることは、（恩恵の）提示の項目に該当する問題であるが、とりわけ評価の対象にはならない。この論拠としてはアーイシャの伝承があげられる。彼女は神のみ使いに、クルアーンの「彼の計算はすぐに清算され、」（第84章8節）という一節の説明を求めた。すると預言

者は答えた。「アブー・バクルの娘よ。それは（恩恵の）提示に該当することだ。計算の対象になる者は罰を与えられうることを知らないのかね。」提示というのは恩恵を明らかにし、恵みについてきちんと述べ立てることである。「その時右手に書物を渡される者は、」（第84章7節）という一節を解釈してえられるような問い、つまり恩恵にたいしてきちんと感謝したか、といった事柄と関連している。（以上は要するに恵みに感謝すべきであるが、罰を構成する要因の一部とはならないということである。）

法的に認められた範囲で欲望を満足させ、美味なものを口にすることは、評価の対象とはなるが、すぐにそれで罰されることはない。これが現世について述べた預言者の伝承、「そこで許されたことは計算にかけられ、禁じられたことは処罰の対象となる、」の真意である。

過度にわたらぬもので満足することの美点に関する論拠としては、アッ=ダッハークの伝承があげられる。アッ=ダッハークは人々の代表として預言者のもとにやってきたが、彼らの間で豊かな生活を享受していた。そこで預言者は尋ねた。「ダッハークよ、君はどんなものを食べているのかね。」そこで彼は答えた。「肉、蜜、油、麦です。」そして「その他にはないか、」という問いには、「神のみ使いが教えて下さったものです。」と答えた。すると預言者はいった。「神はこの現世でのりを越えた人々についての例を示されている。」そしてこうたしなめた。「腹一杯以上は、決して口にしないように。」

それ以前に預言者は彼に説明している。つまり食物は最初にいかに美味で良いものであっても、終わりにはまずく口あたりが悪くなる点で、現世とそっくりであるというのである。この例を見ても、過度にわたらずに満足することの美点は明らかであろう。

アル=アフナフ・イブン・カイスは次のような話を伝えている。彼がウマルを訪れると、ちょうどウマルのもとには大麦のパンと油を入れた大皿がもち運ばれ、食事が始まったばかりであった。ウマルはアル=アフナフと

もに食事をするよう誘なったが、彼はそれを楽しむことができなかった。そしてのちにアル=アフナフは、その点についてハフサに告げた。「神は信者たちの長に大変な恩恵を授けられています。だが信者の長は自分自身の恩恵を考慮し、食物を良いものに限るべきでしょう。」ハフサがその話をウマルに伝えると、彼は涙を流していった。「おまえはどう思うかね。三人の仲間がいたがその一人が最初に旅立ち、次に二人目が出発し、三番目の者がその後を追ったとしても、最後の者は前に追いつくことができるだろうか。」彼女がそれを否定すると、ウマルは続けた。「まず初めに神のみ使いが旅立ったが、現世の欲望に負けることは一つもなかった。次いでアブー・バクルが出発したが、彼も同様であった。ところでこのウマルが現世の欲望にかまけているようでは、二人に追いつくことは決してできはしない。」この事例から見ても、過度にわたらず満足することの美点は明らかである。

結局のところ問題は以下の四つの点に要約されるであろう。第一は飢えをしのぎ、宗教的義務を果たすに十分な力を与える範囲の問題であるが、これは報奨が与えられこそせよ、非難が寄せられるものではない。第二はその範囲を越えて満腹するまでの範囲の問題である。これは許されており、これに関しては計算がなされるがその重みはわずかで、(恩恵の)提示で足りる場合もある。第三は法的に許された快楽を遂行し、美味なものを口にすることである。これは認められているが計算の対象となり、恩恵に感謝し、飢えた者たちの権利を認めることが要求される。第四は満腹以上のものを口にすることであるが、これは罰の対象となる。なぜならば既に述べたように過度の飽食は禁じられているのだから。

ところで原書には「それを強制せよ」という指摘があるが、その意味は禁止することである。これについてはアブー・ハニーファの伝えている話がある。彼は、「『物が欠乏したら、それを強制せよ』といわれますがそれはどういう意味でしょう、」という質問を受けた。そこでアブー・ハニーファは説明している。「禁止が一番真意に近いであろう。その例証としては預

言者の次のような伝承があげられる。『君たちの誰かが大食いをしたならば、「神よ、われらを見棄て給わぬよう」と唱えなければならない。』食についてのジャシュウ (jash') とは満腹以上に大食することである。これについては次のような説明がある。満腹を越して大食することは、神の怒りの原因となる事柄である。そして怒りの原因とは、禁じられたハラームの行ないを敢えてすることである。これ以前の段階で論じられたことはハラール、つまり許された範囲内のことであったが、ハラールの範囲を越えた行為は処罰の対象となる。つまり必要ではない状態でものを口にすることは、その多寡にかかわらず罰されるのである。これについてはアブー・バクルの伝えている伝承がある。それによれば預言者はいつている。「不法な財をもとに育った肉は、すべて地獄の却火に相応しい。」また別の伝承にはこうある。「ひととは不法に手にした財を、家族を養うため、自分の利益のため、他人に喜捨を施すために使用するであろう。だがそれを自分のものとしようが、子孫のために残そうが、彼を地獄の却火に近づけずにはいない。」また別の伝承もある。「勝手気ままに利益を求める者は、どの門からとはおかまいなく地獄に入れられるであろう。」また預言者はサアド・イブン・アビー・ワッカースにいつている。「良いものを口にしたら、それに応じて神を祈念するのだ。」またアブー・フライラは次のような伝承を残している。預言者は後代の人々についてこう述べた。「彼らのうちのある者は汚れ、心乱れて口にするであろう。『おお、わが主よ。』しかし食べ物、飲み物、着るもの、すべて不法なもので、もっぱら不法で身を養っている者についてなんの答えようがあるのか。」また別の伝承がある。「復活のしるしの一つにこのようなことがあげられる。信仰上の兄弟は合法的な財に優るなどと口にしながら、その実みなが兄弟より金を大切にようになる。」

原書はさらに議論を展開する。そして衣服の問題も以上に準ずると述べている。つまり陰部を覆い、寒暑の害を避け、礼拝その他の宗教的義務の遂行を可能とするためにあてられる費用は、合法的なものとみなされる。

そのさい奢侈を避け、過度にわたらずに満足することが良い点は、食に関する場合と同様である。これについては預言者の伝承がある。彼は美しい飾りのついた着物を着ていたが、それを脱ぎすていった。「眼が飾りに氣をとられて、礼拝に身が入らない。」またウマルについては次のような話がある。ウマルが自分の服を仕立屋に渡してそれを繕うよう命じた。仕立屋は彼のために服を一着新調して、両方を携えて彼のところにやってきた。するとウマルは自分の古い服を受け取り、新しい服を返していった。「君の仕立ててくれた服は布地も良く、立派なものだ。しかし私のこの服はよく汗をとるのでね。」またアリーに関する伝承もある。彼は日頃美しい服で身を飾ることを嫌ったが、こういつている。「私は神を崇めるに相応しい服で満足している。」このことからアリーが、高価な服を身にまとう余裕がありながら、それなしで満足していたことが知られる。

第 11 節 努力の諸範疇

次いで、議論は他の問題について展開される。そこでは専ら固有の問題、つまり人間の努力が三つの範疇に分けられるといった議論が対象となる。その第一は宗教的義務のような人間を利するものである。第二は神にたいする反抗のような人間の害となるものである。そして第三は利害と関わりのないものであるが、それは口にして許されること、例えば私は食べました、飲みました、立ち上がりました、座りましたと述べるといった類のものである。このように三つに分類するのが法学者たちの見解である。

ただしカッラーミーや派の主張によれば、人間の努力には二つの種類しかない。つまりひとを利するものと、害するものの二つである。そして努力に関しては行為自体で規定されることはない。この点については、クルアーンにも指摘がある。「真理を離れては、虚偽のほかになにがあろうか。」(第 10 章 32 節) したがって彼等はものごとを明確に二分する。そして真理とは人間を利するものであり、誤謬とは人間を害するものであるとする。

クルアーンはいっている。「ひとは自分の稼いだものでおのれを利し、また自分の稼いだものでおのれを損なう。」(第2章286節) ここで……したものという部分には mā という語があてられているが、これは厳密には……したすべてのものの意である。したがってこの章句から、人間のあらゆる稼ぎ(行為)は、彼を利するものか、害するものかのいずれかであることが明らかである。クルアーンは、「善行をなす者は自分のためにそれを為す、」と述べている。これにより人間の行為は、良いか悪いかの二つに一つしか該当しないことは明白である。神の書にはまた、人間の発する言葉はすべて書きとめられるとある。「言葉を発すれば必ず(看視者の耳に聞きとられ、書きとめられる)。」(第30章18節) つまり人間のあらゆる行為は書きとめられているのである。「彼の行ないはすべて天の書冊に書きとめられる、」(第54章52節) とあるように。要するに審判のさいには、人間のあらゆる行為が洩れなく秤にかけられるのである。「彼らは自らのあらゆる行ないを眼前に見る、」(第18章49節) とクルアールにあるように。ここで mā はすべて……したものを意味するが、これはなに一つないがしろにされないということを示している。ここではその意味を二つの側面から把えることにしよう。その一方は神と信者との約束は、いかなる状況においても履行されねばならないという点である。「アッラーに仕えよ、なにものをも彼に等しいとしてはならない。」(第4章36節) 「われに仕えさせるためにのみ、ジンと人間を創った。」(第51章56節) 以上のクルアーンの章句がその例証である。したがって人間はこの約束、契約を履行するか、破棄するかのいずれかである。それ以外の可能性は存在しないが、前者の場合に彼は自らを利し、後者の場合には自らを損なう。

この説については以下のような論証もなされる。つまり当然のことながら許された行為とされるような(中間的な)行為も二つの種類に分類される。つまり一方はひとを利するような性質のもので、合法的な行為にひとを誘なったり、不法なことから遠ざけるようなもので、これらについて

は積極的に行なうような命令が下され、結局ひとを利するものとみなされる。他方は不法なことに誘なったり、合法的なことから遠ざけるようなもので、これらについては否定的な命令が下され、ひとを害するものの部類に入れられる。このようにあらゆる努力は、ひとを利するか、損なうかのいずれかに属する以外にないのである。

これにたいしてわれわれは次のように反論する。教友たちや彼らの後継者である第二世代の人々、あるいは学者たちは以下の点で合意していた。つまり信者たちの行為としては、それを行なうよう命令が下され、勧誘されているものと、行なわぬよう禁止されているものがある。前者はひとを利する行為であり、後者はひとを損なう行為である。ただしそれ以外に許された行為というものがあるが、それについては命令、勧誘あるいは禁止が該当しない。つまりここには人々の合意によって確認されている第三の部分があり、それはひとを利するとも、損なうともいいえない性質のものである。これは法的な判断によってしか、他の二つの部分との相違を明かしえないものであり、それを行なっても報奨は期待できず、それを行なわなくとも罰の対象とならない中間的な行為である。ひとを利する行為を行なえば報奨が期待される。クルアーンには、「善行をなした者たちについては、彼らの魂のためにしとねが準備されるであろう、」(第30章44節)あるいは「善行をなす者は自分自身のためにそれをなす、」(第17章7節)とある。他方自らの利益に反する行為とは、それが罰の対象となるような行為である。クルアーンは、「悪行をなす者は自分のためにそれを成す、」(第17章7節)とあるが、これはその行為が不利益になるという意味である。ところで諸言行に関して報奨、あるいは懲罰の対象とならないものは、問題外のものとなされるのである。この証明としては次のようなクルアーンの一節があげられる。「神はなんじらの誓いのうち、不用意な言葉をとがめ立てはしない。」(第2章225節) 不用意な誓いがとがめられぬことが、典拠にもとづいて立証されれば、それはそのような誓いが報奨の対象

ともならないことの証明ともなるであろう。要するにそれが懲罰、報奨いずれの対象ともならないことが典拠にもとづき明らかであるとするならば、それは問題外のものであるというのである。クルアーンには、「なんじらがそれについて誤ることがあっても罪ではない、」(第33章5節)という指摘がある。したがって誤謬を犯しても、とりわけとがめられないと典拠にあったように、それがすぐに評価の対象とならなくとも問題はないのである。それはまさに問題の外にある事柄なのだから。預言者は述べている。「わが共同体は誤謬、忘却から免れることであろう。」この意味は、人々は罪から免れているということであるが、これも賞罰の対象とはならないことを明示するものであろう。このようにひとの報奨の対象とならない行為が、同時に処罰の対象ともならぬ可能性がありうるものが、典拠にもとづいて明らかであるならば、それがひとを利するもの、害するものといった性質では規定しえない可能性を示唆しているのである。ひとを利するものとは、特に(彼が来世において利益を得るようなものであり、ひとを害するものとは、彼が来世において)不利益を得るようなものである。ただし人間の言行の中には来世における利益、不利益と直接関わりのないものがあるが、それらが問題外のものとなされるものである。

ところで問題外の言行が当人のものとして記録されるか否かという点に関しては、法学者たちの間で意見が分かれている。

一部の法学者は主張している。それは書きとめられることになんの意味もないので、記録されることはない。来世においてそれが利益につながるか、損失につながるかが問題なのであるが、この場合は両者のいずれにも該当しないため、この種の行為を書きとめる意味がないのである。

ただし大部分の法学者は、クルアーンの「われは彼があらかじめ行なったこと、その結果を書きとめる、」(第36章12節)を引いて、それらが記録されるという説をとっている。ただしまず(善悪の)対象となる事柄がすべて記録され、そのあとで問題外の事柄が記載されるというのである。

そしてクルアーンの一節を引いている。「まことにわれはなんじらの所業をすべて書きとめる。」(第45章29節) またアーイシャが伝えている預言者は伝えている。「1人の人間の記録をもった二人の天使が立ち上がり、もしもその最初と最後の部分が良ければ、中間の悪業は消し去られる。最初と最後がそうでなければ、すべて書きとめられたままとなる。」

問題外の行為が記録されないという説をとる者たちの見解も、みな一致している訳ではない。一部の者は主張している。巷間の人々のいうところによれば、このような行為は月曜日と木曜日に提示される。つまり評価の対象とならないような行為は、この両日に消し去られるというのである。ただし多数意見は、アーイシャの伝承を根拠に、それが審判の日に抹消されると考える。原書の引用している彼女の伝承によれば、預言者はいつている。「神の許にある書冊には三つの種類がある。まず第一は善悪いずれにせよその報いが問題とされないような行為に関するものである。第二は人間の不正に関するものであるが、この種の行為に関しては公正さ、それを求める道についての配慮が必要である。第三は善悪いずれにせよ報いが問題となるような行為に関するものである。」ところでこれは、正統派の人々の間では確実なものとして受け入れられている伝承である。

ただし問題とならないような行為については意見が分れている。一説によればそのような行為は善悪いずれの報いもないような問題外の行為である。ただし他の説によれば、それは人間と神の間の事柄で、それについては人間のいかんともしがたいことである。ただしクルアーンにも、「神はなんじらを罰をもって遇し給わぬ、」(第4章147節)とあるように、神は寛大にして、よく宥し給うのである。また他の説によればそれは小罪にあたるとされている。したがってそれは大罪を避ければ宥される。クルアーンは、「なんじらが禁じられた大罪を避けるならば、われはなんじらの罪過を消滅させる、」(第4章31節)とある。したがって結局は問題とならぬ行為とされうるのである。さらに他の説によれば、その意味するところは信仰

心を装っている不信者たちの行為である。元来彼らは本当に信じていないのだから、その行為は問題となりえない。つまりそれは彼らにとって益がないのである。多神教に陥る場合には宥しが期待しえないことは、「神は多神教徒を宥したまわぬ、」（第4章48節）とクルアールに指摘がある。多神教を信じた者の行為に価値がない点は、「われは彼らの行なったことに報復するであろう、」（第25章23節）という一説に明らかである。だが以上の意見でもっとも明快と思われるのは、第一の説である。

第三の範疇に入るような許されており、ひとの利益と関わりのないような行為とは、結局いかなる評価の対象ともならないものといえるが、原書で著者はそれを、善悪いずれにせよ報いを伴わぬ行為と規定している。そしてイブン・アッバースの説を引いている。クルアーンには、「神は望みのものを取り消し、また確定される、」（第13章39節）とあるが、この意味は不幸な人々の名を記す書冊からある者の名を抹消し、幸福な人々の名を記す書冊に書き加えるということなのである。クルアーン注釈学の専門家たちは、イブン・マスウードが次のように祈願していたことを伝え残している。「神よ、もしもわれらが名を不幸な者の書冊に書きとめられたならば、それをそこから抹消し、幸福な者の書冊に書き写し下しますよう。あなたは啓典の中でまさに『神は望みのものを取り消し、また確定される、』と書かれているのですから。」またイブン・アッバースは、おそらく彼自身の考えとして、抹消、確定は幸福、不幸、生と死といったことに限られず、あらゆる問題を含むものだとしている。そして法学者の中には、最初の説を受け入れて次のように説く者がある。われわれは不信者が信仰に入り、信者が不信に陥り、健康な者が病み、病人が回復するさまを見かける。同様にあらゆる人間についての神の知にいささかの变化もないままに、幸福な人間が不満を口に、不幸な者が幸福である姿も見かける。「前の場合も後の場合も、命令は神に属する。」（第30章4節）「神は望みのことを行ない給う。」（第3章40節）「神は望みのことを定め給う。」（第5章1節）（以

上の章句は神の力を明かしているがこのような変化が認められるのである。)そしてこの点について次のような章句を引いている。「彼らのある者はみじめで、他の者は幸福である。」(第11章105節) だが多くの者は、イブン・アッバースの第二の考えが正しいとしている。その理由はそちらの見解の方が、「幸福な人間とは母親の腹の中で幸福な者のこと、不幸者とは母胎において不幸な者のこと、」という有名な伝承に一層適合するからである。「神は望みのものを取り消し、または確定される、」(第13章39節)という一節の解釈としては、人間に関する書冊から善悪にかかわらず報いを伴わないような、問題の対象とならない行為について取り消され、報いを伴うものが確定されるということである、とする意見がある。その例証としては、すでに引用した、「神の許にある書冊には三つの種類がある、」というアーイシャからの伝承が引かれる。ムハンマドがこの伝承を上述の(幸福な人間、不幸な人間について語った)伝承の後に引いているのは、これを証拠として用いるためだったのである。ただし他の説によれば、これはある者の心から知を奪い、それを他の者の心に置きうつすことであると解釈される。その結果はクルアーンの、「望みの者を迷うにまかせ、望みの者を正しく導き給う、」(第14章4節)と同じような意味になる。さらにはこの意味は人間一人一人が恵み、平安、不幸、病い等々について誓いを立てた事柄に関する取り消し、確定であるとする説もある。

その後に引用されているのがアッ=スィッディークの伝承である。アブー・アル=ハイサム・イブン・アッ=タイハーンの家で預言者と共にした食事についての伝承であるが、この伝承についてはすでにそれを完全に引用した。ただしこれには補足する部分があるとされている。「信者たちは目の前に食事が供されれば、『神の御名において』と唱え、食事が終われば、『神よ讃えあれ』と唱える。」この補足の部分は伝承学者たちの著作には記録されていない。だがムハンマドはその伝えるところに関しては高い信頼をえている学者であり、考えられる事態は、これが伝承を伝えたのちに彼自身

が語った言葉であるということである。このような内容と関連する預言者の伝承には、次のようなものがある。「信者は眼の前に食事が供されれば、『神の御名において』と唱え、食事を終えると、『神よ讃えあれ』と唱える。それは木の葉が吹きちらされるように、海の泡ほどの罪障を拭い去ってくれる。」預言者の伝承には、「あらゆる恵みについて神を讃えよ、」あるいは「もしも現世が一つの魂となり、信者がそれをそっくり呑みこんだとしても、『神よ讃えあれ』と唱えさえすれば最も良いことがもたらされるであろう、」というものがある。神は現世を貧しく、卑しいものとしているのであり、それゆえに「現世に喜びは少ない」という言葉が引かれるのである。そして至高、至善の神を、「神よ讃えあれ」という言葉で喚起することは、その偉大さを認め、感謝することにつながり、それゆえに現世のすべてより価値が高いことになるのである。

第12節 生活の飾り

次いで男性が絹を身にまとうことは、戦場における以外に忌避されるという問題が論じられている。ただしこの点は原書のとり扱っている主題のうちには入らない。原著者がこの書を著わしたのは禁欲について論ずるためであり、この間の経緯としては次のようにいわれている。多くの著作を著わしたのちに彼は敬虔さ、禁欲について書くつもりはないかと依頼された。彼はそのさい、売買についての著書を書き終えたばかりで、その後この書を書き始めていると答えている。だがその後投棄の必要に迫られ、充分な能力が発揮できず、結局意図を実現することができなかった。そこで人々は彼が書こうとした著作の章立てについて書きとめることを求め、彼はそれに答えて禁欲と敬虔さに関する書千章の構想を明らかにしている。この点について若干の歴史家たちはこう書いている。「ムハンマドが死に、アブー・ユースフがハナフィー派の法官として多忙であったためそのような仕儀となったが、このような事情がなければ後代の研究者たちを悩ます

ような大著がものされたことであろう。その書は敬虔と禁欲についての最初の著作であり、したがってその後半ではそれと関連した絹の着用の問題のような主題が論及されることになっている。絹の着用に関して論拠とされるのは預言者の伝承である。彼はある日右手に金、左手に絹をもって外出した。そしていった。「この二つはわがウンマの男性にとっては禁じられている。女性はその限りではないが。」ところで（男性には）戦場における以外に絹を身にまとうことは忌避されている。アブー・ハニーファによれば、戦場においても同様である。ただし原著者によれば、それが厚手で、武器にたいする防御に役立つ場合には、戦場で身につけても構わない。また経糸や緯糸が絹でないものならば、戦場あるいはそれに類する場合以外にも身につけることが許される。原書のこれに該当する部分にこれについての説明がある。

また一説によれば金銀を素材にし、錦で蔽った寝台を家におくことは許される。それが人々の眼を娯しませるために用いられ、実際にそれに座ったり、そこで寝たりしなければ構わない。これについては教友や、第二世代に属する先人たちから伝えられている逸話がある。伝承により若干の異同があるが、それによればアル=ハサンとアル=フサインは、後者が（ササーン朝最後の皇帝の娘である）シャーフバートゥーと結婚したさいに、家を錦の布団や金銀の器で飾っていた。そこに預言者の教友で、当時在命中の老人が訪れ、尋ねた。「神のみ使いの息子よ、君の家にあるこれはいったいなかね。」するとこういう返事が返された。「これが私の結婚した女性です。彼女がこのような家財道具を持ってきたのですが、それを断わるのも礼儀に反するので。」またムハンマド・イブン・アル=ハナフィーヤについても次のような話がある。彼も同じように家を飾ったが、ある教友たちからその点を非難された。そのさい彼は答えている。「私は他人の眼を娯しませるためにこうしているのであり、自分でこれを使っている訳ではない。これは他人の心が私に奪われることのないよう、また私を醜い視線で眺め

ることのないようにするためのものだ。」以上から、このような目的のためならば特に問題はない点が理解されるが、そうしない方がより良いとみなされる。これはクルアーンの「いえ、誰が美しいものを禁ずるのか、」（第7章32節）の意味するところと同質のものといえる。ところで（上述の寝台に関して）ムハンマドはそこに座ったり、そこで寝たりしてはならぬと主張しているが、アブー・ハニーファは座っても、寝ても差し支えないが、（絹や金を）身にまとうことは望ましくないと述べている。身にまたとえばそれが常習になるが、座ったり、寝たりする程度では本性に影響を与えることがなく、それゆえ問題がないというのである。

マスジドを、漆喰やチーク、金で飾っても問題はないとする説がある。しかし原著者によれば、彼の師は〈問題はない〉といわれるが、それは言外に報奨がないことを暗示していると述べているとのことである。この表現は禁止を解いているのみで、報奨を裏づけるものではなく、とりわけ悪くはないという程度のことを指摘しているにすぎない。これは法学派の一般的見解であるが、ザーヒリー派の者はこれを忌避し、そうする者を罪人扱いしている。彼らの考えによれば、これは神のみ使いが選んだ方法と異なるというのである。なぜならば預言者は、「貴方のマスジドを壊して建て代えましょう」という提案をうけたおりに、「小屋はムーサーの小屋にしくはない、」あるいは「小屋はムーサーの小屋のようなものが良い、」と答えているからである。ところで預言者のマスジドの屋根は棗椰子の葉で葺いてあったが、雨が降るとこれが縮み、人々は雨に濡れたまま土の上でひざまづかなければならぬほどであった。またアリーに関する逸話があるが、これによれば彼は美しく飾り立てられたマスジドの前を通りかかっていった。「これはいったい誰の買物なのだ。」彼はマスジドのこのようなたたずまいを嫌って、このようなものいいをしたのである。また別に次のような逸話もある。アル=ワリード・イブン・アブド=ル=マリクが、預言者モスクを飾り立てるために4万ディルハム寄贈した。それを聞き及んだウマル・

イブン・アブド＝ル＝アジーズはいった。「お偉方はとにかく、貧しい者がその金を必要としているのに。」これは預言者の次のような伝承にもとづいている。「復活の時の印としては、豪華なマスジド、高いミナレットはあっても、人々の心には信仰心がかけられないことがあげられる。」

しかしわれわれは、これを認める見解を採用する。それは信者の数を増やし、人々を促してマスジドに赴かせ、そこで礼拝の時間まで待つよう配慮させることに役立ち、彼らが身も心も神の教えに従い、自らの意志で良い振舞いを行なうための刺激となるからである。この論拠となるのは以下のような伝承である。イエルサレムのマスジドを最初に建立したのはダーウッドであり、完成させたのはスライマーンである。スライマーンはマスジドを飾り、またドームの上に大きな燭台を取り付けたが、これは当時もっとも華麗で、珍しいものであった。その光は1マイルも遠くを照らし、1マイル離れた場所で紡ぎ女たちが、その明かりで糸を紡いだといわれている。また預言者の歿後メッカの大寺院を最初に飾ったのはアル＝アッパース・イブン・アブド＝ル＝ムッタリブであり、ウマル・イブン・アル＝ハッターブも預言者モスクの補修と拡張を行なっている。その後ウスマーンも、私財を投じてマスジドを建設、拡張したばかりでなくその飾りつけも行なっており、以上からこれが容認される点は明らかである。他方この説に反するものとして上述の伝承があげられるが、その後半、つまり「人々の心には信仰心がかけられない、」という部分と関連する解釈には諸説がある。その一つは、人々はマスジドを飾り立てるが、そこできちんと集団礼拝を行なうことがないというものである。他の解釈は、正当に得たものではない財で飾り立てる、あるいは目や耳を娛しませるためにだけ飾り立て、したがって結果的には由緒ある品々の蒐集といったことに堕してしまうというものである。以上はすべてひとが、合法的な手段で獲得した自分自身の財で飾り立てる場合である。これをマスジドに属する財で行なう場合には、罪を犯したことになる。マスジドに属する財を使用するさいには建築上の

細則があるが、飾りを施すことはその規定の中に含まれていない。この点については長老たちの言及がある。つまり監督官はマシジドの財でその壁に漆喰を施すことは可能である。ただしそれで飾りを施すことは許されていない。したがって漆喰に彫りものを施すことは建築の規制中に入る事柄なので、もしも彼がそうするならばそれは彼の責任となる。漆喰を塗ったのちにそれを細工することは、建物を強化するのではなく、弱体化させることにつながる。それゆえ監督官は、マシジドの財でそれを行なうための支出に責任をもつことになるのである。

ただし次のような説もある。ある個人が家を建て、その屋根を金で飾ることがあるが、それは罪とはみなされない。つまりひとは自分の家を飾り立てるために支出するが、それは自分自身に役立てるためである。他方マシジドを飾り立てるためになされる支出は、自分自身ばかりではなく他人のためにも役立つのである。もしもこのようにしてひとが自分の財を自分自身に役立てることが認められるのであれば、それが許される場合には、自分と他人の利益のために支出される方が、よりよいとみなされるべきであろう。ところでわれわれはマシジドを立派にするよう命じられているが、一般の民衆にとっては飾りを施すことによって立派さが増すことは疑いのないところである。このような論議の結果、飾りを施す者はむしろ報奨に値するということになるのである。預言者の伝承には、「自分の財を建物以外のあらゆるものに支出する者は、良い報奨を受ける、」とある。だがいくつかの伝承によれば、その後に「ただしマシジドは例外である、」という補足がある。もしもこの補足が正しいならば、マシジドの建設とその飾りのための支出が報奨の対象となることの証明となるであろう。

この考えは衣服の場合にも通用する。したがって男性といえども最も美しく、上等な衣服をまとうことに問題はないのである。預言者はフェネック狐の毛皮と絹で作った上等な外衣をもっており、祝祭や外交団との交渉のさいにそれを身につけていた。ただし通常はこのようなものを着ない方

が望ましい。伝承によれば、預言者の普段の仕事着は、塗物師のそれと変わらない程度のものであった。

同様に美しい娘と夜を過ごすことにも問題はない。預言者も法的に結婚可能な女性と夜をともし、例えばマーリヤにイブラーヒームという息子を産ませている。またアリーもそのような女性と夜をともし、ウナム・ムハンマド・イブン・アル＝ハニーフィーヤに子供をもうけさせている。以上からこのことが認められている点は明らかであるが、その論証としては、「いえ、誰が神の授けられた美しいものを禁ずるのか、」（第7章32節）という一節があげられる。

ただしこのような主張もある。人々がもしもこのようなものなしに満足し、もっぱら善行にいそしめば、それらは来世に送りどけられるが、その方が彼らにとっては身のためである。この例証としてはアブー・ザッルの逸話があげられる。彼は祭礼の時期に、カアバ寺院の（黒石の）蔽いに身をもたせかけ大声で叫んだ。「私を見知る者はすでに私が誰か知っているであろう。知らぬ者にいうが自分は神のみ使いの友、アブー・ザッル・ジャンダブ・イブン・ジャーナダである。もしも君たちが旅立ちを望むならば、その準備をせよ。もしも君たちがいまだに来世への旅立ちの準備ができていないならば、それを免れる術が絶対ないことを知れ。現世での旅ならば、引き返したいと思えばそれも可能である。貸した金が欲しいと望めばとりかえしはきくし、富を願えばそれが叶えられることもあろう。ただし来世への旅には決してそのようなことはない。」

ある時ヤフヤー・イブン・ムアーズはこのような質問をうけた。「おぞましい死をめぐって、われわれに確信をもたせてくれるものはなんでしょうか。」そこで彼は答えた。「君たちは現世を賞で、それを後にすることを嫌っている。そして恋人の姿を見かけるや、すぐに添いとげようという気になる。それゆえ一番良いことは、現世においては必要不可欠なものだけで満足し、自分で稼いだその余りの分を来世にまわすことだ。ただし合法的

に利得をえたのちに、それで現世に楽しみを見出したところで、なんの悪いことがあるだろうか。」

合法的な手段で稼いだものを自分自身と家族のために支出しても、神のために使うべきものを誤った仕方で行ったならば罪となる。その点で見習うべきもっとも良い方法は、使徒たちの流儀である。現世において彼らが、必要不可欠のもののみで満足していた点については、すでに述べた。この点にかけてわれわれの預言者は、特筆に値するのである。彼は地上の宝庫の鍵をさし出されたが、それを断わってこういつている。「私は下僕の預言者であり、時に飢え、時に満ち足り、飢えた時には忍耐し、満ち足りた時には感謝します。」ただしそうはいつでも、場合によっては上等なものを口にすることもやぶさかではなかった。ある時預言者は、「油と蜜をぬった上等なパンを口にしたいものだ、」といった。そこでウスマーンがそれを作り、皿にもって給仕した。一説によれば預言者はそれを口にしなかったとされているが、より正確には彼はその一部を食べ、残りを他人に与えたということである。またある時預言者は肥って若い山羊の焼肉を供された。彼は他の教友たちとそれで食事をした。そして給仕された肉を食べ終わると[原文に脱落あり意味不明のため省略]。また若い羊の焼肉が給仕されたさいに預言者は、「私に肘のところを取ってくれ給え、」といっている。以上の故事は彼が時にはましな食事をとっていたことを示しているが、これはそうしても問題はないことを明らかにするものである。ただし彼が通常そのようなものなしで満足していた事実は、その方がより良い態度であることの証といえよう。アーイシャは預言者について涙ながらに語っている。「絹も身にまとい、大麦のパンを十分に口にしなかった人よ。」この結果として、必要最小限のもので我慢することに価値があり、それ以上の豊かさ、快楽の追求は、奢侈とみなしうるといえるであろう。預言者の伝承には、「神は自らの定められた事柄にまつわる結果ばかりでなく、その下された潤沢さの結果をまのあたりにすることを賞で給う、」とある。また「私は固苦しい

修道者の教えではなく、寛容な正しい教えのために遣わされた、」ともある。かくしてわれわれは、潤沢な生活が豊かさと関わるものであり、したがってそれゆえに誰も罰されることがない点を理解しうるのである。だが自分自身に厳しく、快楽を絶つことの方がそれより優れており、そのような人間は審判を受けずに楽園入りを果すともがらの中に数えられるのである。これについては伝承がある。預言者が、「神は私に、私のウンマのうち7万人を裁きをまず楽園に入れるよう約束された、」といった。するとある者が尋ねた。「神のみ使いよ、それはいったいどのような人たちですか。」すると預言者は答えた。「それは盗みを働かず、徒らに悲観的な態度をとらず、苦難に打ち挫がれず、その主に自らを委ねる者たちのことである。」この伝承にはさらに続きをもつものがあるが、それによれば預言者は、「その上彼ら以外に7万人の者を（裁きをまず楽園行きにして下さい）、」と請願したとある。別の系譜に属する伝承では、預言者は、「最初の一群に加えて他の7万人の一群をお増やし下さい、」と懇願したとある。またよく知られた伝承にはこう述べられている。「審判の日に人間は、以下の四点について答えずには一歩も先に進めない。つまり使い果たした年令、費やしてきた若さ、獲得した財産の出所、その使い途である。」そして財が神の満足を求めるために用いられた場合には、肉体的な快楽を求めるために使われた場合よりも、一層好ましいとされる。

ひとが賞讃的となりうるような習慣としてはさまざまなものがあげられるが、そのうちには公然と人前で、あるいはこっそりと、淫らな罪を犯さぬように努めることがあげられる。また宗教的義務を正確に果し、それを定めの間に行ない続けることもその中に数えられる。また不法な財に手を出さず、合法的な手段で利潤をあげること、ムスリム、あるいは契約の徒の誰にたいしても不正を働かぬこともその例である。しかしそれ以上のことについては、神はわれわれにとりわけ難しい指示を与えている訳ではなく、したがって自分自身、あるいは仲間の信者の誰にたいしても窮屈

な要求をしてはならないのである。

ムハンマド・イブン・サマーアの伝えるところによれば、ムハンマドは最後に述べている。本書で確定されたのはウマル、ウスマーン、アリー、イブン・アッバースその他預言者の教友たちの見解であり、法学的にはアブー・ハニーファ、アブー・ユースフ、ズフルやその後の法学者たちの意見を踏襲している。神は正しきことに最も精通されており、それゆえ神のみを讃えまつる。神よ、われらが長ムハンマドとその一統、そのともがらを祝福し給え。われらは真の代表者、神のみで足りる。

ムハンマド・イブン・ハサン・アッ=シャイバーニーの利得の書完結